ラブストーリー

まなぶおじさん

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、源さくらに全てを捧げた、乾太郎の恋物語。

このＳＳは、作者の独自解釈が多々含まれます。

文字数が多すぎましたので、分割して投稿します。

目次

乾太郎編
一話 1
二話 20
三話 38
四話 55
五話 76
六話 85
七話 102
源さくら編
一話 112

乾太郎編

一話

源さくらの遺体を前にして、そっと深呼吸する。

さくらの青ざめた顔が、ろうそくの火にふわりと照らされている。目は、あの日からずっと閉じられたまま。時の流れのせいで、肌という肌が腐敗しきっていた。

さくらがこうなって、もう十年が経つ。

それでも俺は、今も、源さくらのことが愛おしい。

――ほんとう、色々なことがあった。まるで走馬灯のように、これまで全てのことを思い出す。

――

席替えの時期になると、大抵のクラスメイトは大袈裟な声を出したり、笑ったり、難なく隣の女子と仲良くなれたりする。

対して乾太郎は、「ふうん」と他人事のように鼻息をつくのだ。これは、小学三年になった今でも変わらない。

席替えが終わり、それだけで周囲のクラスメートが好きに盛り上がる。お前の近くかよーと毒づく男子、よろしくねーと挨拶する女子、仲良くしてねと微笑む教師、無言になるしかない太郎。

別にふてくされているわけでも、他人嫌いという事でもない。生まれつき口下手で、趣味らしい趣味といえばサガでの散歩ぐらいなもので、それでいてとくべつ勤勉というわけでもないから、こうして空気のような存在になってしまっているだけだ。

席替えをしても、誰も太郎のことなんか気にも留めない。

新しい場所で頬杖をついて、第三者めいた目つきをしながら、心のどこかで「いいなあ」と思いつつ、太郎は次の授業を緩慢に待つ。周囲と比べて、やっぱりシケた生き方をしているなとつくづく思う。

「――あ」

その時、目が合った。
「君は、えーっと……」
前の席の女の子と、目が合った。
「そうだ、乾君だったね。私は源さくら、これからもよろしく！」
笑顔の源さくらと、目が合った。
――不意過ぎて、すぐにでも言葉を吐き出せない。ばかみたいに口を半開きにさせながら、「あ」だの「あ」だの「あ」だのと、蚊の鳴くような声しか出せない。
「あ……ごめん、驚かせちゃったかな？」
さくらの眉が、困ったようにへこむ。
そんなさくらの言葉に対して、自分は必死に首を横に振るう。
「そっか。よかったよかった」
それだけで安心してくれたのだろう。さくらは、目と口で笑ってみせてくれた。
「今日からお前の隣かー。よろしくなー」
「うん！　よろしくねー」
さくらの隣になった男子が、けらけらと挨拶をする。さくらも、慣れたような素振りで受け答えする。
――ふたたび、沈黙する。
久々に、誰かから笑われた気がする。
それだけでも、今日という日は、これまでの一日とは違うように思える。

――

夜――。
宿題を終えると同時に、母からの「ごはんよー」が聞こえてくる。腹の音を隠さないまま、太郎は居間まで足を運ぶ。
テーブルの上には夕飯が置かれていて、父はビールを片手にテレビを視聴している。母は「座ろ座ろ」と手招きしていた。
従うように、太郎は席につく。テレビから聞こえてくる笑い声を

バックに、いただきますと手を合わせる。
「おお、太郎。今日の学校はどうだった？」
父が、屈託のない微笑みとともに、定番の質問を投げかけてきた。
いつもなら面白みの無い声とともに「何もなかったよ」と告げるだけなのだが、今日は、
「……まあ、席替えがあったよ。それだけ」
「あー、席替えか。懐かしいなー、一大イベントだった気がするな、うわ懐かしい」
母も「そうですねえ」と笑う。どうも、いつの世代も席替えというものは愛されてきた文化らしい。
「どうだ。新しい友達、できそうか？」
「うーん、まあ、頑張ってみるよ」
「そうか」
それ以上、父は何も言わなかった。
そうしてシシリアンライスを口にしながらで、なんとなく、源さくらのことを思い出す。
さくらとは、今年になって初めて知り合ったクラスメイトだ。といっても、これまでに接点なんて全くなかったのだけれど。
「席替えねえ……本当に懐かしいわ。それがなかったら、隣の家の赤石さんとは縁がなかったでしょうねえ」
母が、どこか遠い目をしながらで微笑している。
――そんな自分に対して、さくらは笑顔で挨拶を交わしてくれた。それだけだというのに、未だにあの光景が幾度もフラッシュバックする。
源さくら、か。
自分とは、正反対のような人だ。
さくらは人当たりが良くて、勉強もできて、運動神経も抜群で、学芸会の出し物である白雪姫の主役に抜擢されるほどの人物だ。
すごいな、とつくづく思う。自分と違って、ありとあらゆるものを持っているな、と思う。
最後に好物のイカゲソを食べたのだが、あまり味がしなかった気が

した。

――――

自画自賛が苦手な太郎でも、これは幸運だと言える境遇が二つほどある。

一つは、サガに生まれて良かったということ。

一つは、家と学校との距離がかなり近いこと。

サガはメシも美味ければ風景も良い。何の目的もなくほっつき歩くには、極めて最適な世界だと思う。

そして後者は、小学生からすれば喉から手が出るほど欲しい環境であるはずだ。お陰で、無遅刻無欠席を貫けている。

だから太郎が、教室で一番乗りすることも珍しくはない。一人で席について、頬杖をついて、なんとなく窓の方を見て、次にやってきたクラスメートから一応の挨拶を受けて、ごくごく小さい声で「おはよう」と返して、次第に教室が活気づくのを待つ。だいたいは、こんなふうに毎日を過ごしている。

――太郎が教室に入って数十分後、最初は数人程度だったクラスメートが、やがては数十人にまで膨れ上がっていった。

正直、この空気の方がほっとする。少人数だと、否応なく他人と干渉するハメに陥るかもしれないからだ。

席についたままで、賑やかになった教室をじっと見渡す。

とはいえども、好き好んで孤独に落ち着いているわけではない。友達が欲しいとは思っているし、話しかけられたら全力で対応する腹積もりではいる――ではいる、だけだ。実際は慌てふためき、何と言っていいのかわからなくなって、結果的に沈黙で返してしまうことが多い。ゲームやテレビドラマを見ているわけでもないから、自分から話題を切り出すことも出来やしないのだ。

まあ、慣れたけどさ。

あちこちから聞こえてくる雑談をよそに、太郎は窓をじっと見つめる。今日は晴れ、春らしくずいぶんと暖かい。そういえば今日は劇の

練習があったな、まあ一言だけのセリフだから楽だけれども、
「おはよう、乾君！」
緩慢だった意識が、突如として叩き起こされた。
頬杖をついたままで、半ば本能的に真正面を見る。
笑っている源さくらと、目が合った。
「え、あ、」
そしてそのまま、さくらから目を逸らしては、聞こえるか聞こえないかの声量で「おはよう」と返す。
今の今までは、こんな挨拶でもまかり通ってきた。人と接したいくせに、人見知りであるが故に、堂々とした挨拶すら返せないという自業自得めいた悪循環。
――しかし、
「乾君っ」
名前を呼ばれて、再びさくらと向き合う。
「おはよーございますッ!!」
すごい声だった。
さくらは、ずっと自分の目を見据えている。極めて真剣な顔で、じっと。
――爆発的な緊張感が生じる
――適当に流してはいけない空気が、降って湧いてくる。
さくらは、こんな自分に挨拶を交わしてくれた。ならば、やるべきことは一つしかない。
なけなしの覚悟を、呼吸とともに吸い上げる。握りこぶしまで作って、わざとらしく咳をつく。永遠にも近い準備動作を、さくらは最初から最後まで見届けている。
そして太郎は、口から大きく息を吹いて、
「お、おはよう、源さん」
大きい声を出せた、とは思えなかった。あくまで、先程よりはマシという程度。
――それでもさくらは、満足げに笑顔を振りまいてくれた。
「乾君」

「な、なに？」
さくらは、あくまで笑ったまま、
「――挨拶は基本だよ。できないと、みんなに認めてもらえないよ？」
何も返せなかった。
その言葉には、有無を言わさぬ正しさが込められていたから。
「おはよー、さくらー」
「あ、おはよう！　松木君！」
隣の席の男子から挨拶されて、さくらは当たり前のように明るく返す。
その場面を見つめながらで、太郎はさくらの笑顔を、さくらの忠告を何度も何度も思い返す。それ以外のことなんて、見えもしないし聞こえもしない。
――そして、さくらが太郎のことを一瞥した。にこりと笑われた。
力なく、席の背もたれに身を預ける。
挨拶か。
確かに、その通りかもしれない。

――

「おはよう、乾君」
「お、おはよう」
それからというもの、さくらとは毎朝になって挨拶を交わし合うようになった。
だからといって、これを機に友達同士になったとか、話し相手になれたとか、そういった進展はない。朝来て、挨拶して、さくらの周りに別の友達が寄ってきて、それでおしまいだ。
――それでも、
それでも、自分にとっては大きな進歩だと思う。家族以外との、人の関わりが増えたのだから。
自分は好き好んで孤立しているわけではない。だからこそ、さくらが自分と向き合ってくれたという事実が、本当にほんとうに嬉しかっ

た。
「おはよう、乾」
「あ、ああ、おはよう」
近くの席に腰掛けた男子が、けらけらと挨拶する。太郎も、たどたどしくも挨拶し返す。
ここ最近は、近くに座るクラスメイトが挨拶をしてくれるようになった。かといって、やっぱりそれ以上の進展はないのだけれど。
――それでも、
それでも、太郎からすれば大快挙ともいえる変化だった。人と目を合わせて、人と声を交わす、この時点で「生きている」と実感できるのだ。
人は、一人では生きてはいけない。
改めて、それを実感する。
その時、さくらが「今日もやるよー」と背筋を伸ばす。さくらの友人たちが「お」と笑い、
「張り切ってるねー」
「あったりまえだよ。白雪姫に選ばれたんだよ？　バリ頑張るよ！」
「すっげえなーお前。はあ、なんで俺はセリフの多い役に選ばれちゃったんだろ」
「だめだよー、ちゃんと頑張ろうよ！」
「はいはい」
劇の主役に選ばれてからというもの、さくらは体全体でめちゃくちゃ張り切るようになった。
練習時間になれば率先して動き回るし、長いセリフだってすらすらと言おうとする。まだ前途多難な感じはするものの、今のさくらは十分に輝いているように見える。
少なくとも、自分よりは。
「乾くんっ」
不意に声をかけられ、体全体でビビった。
頬杖が崩れかけたが、なんとか持ちこたえる。
「な、なに？」

「乾君はどう？　私の演技」
「え、あ、」
いきなり問われて、ろくな声をひねり出せない。
それでもさくらは、ずっと返答を待ち続けている。期待しているような表情を、変えようとはしない。
男子が見ている、女子から見つめられている、さくらが真正面から微笑んでくれている。
――そんな、ひたむきなさくらに対しての評価なんて、最初から決まりきっていた。ただ、言葉にできなかっただけで。
つばを飲む。
だから、言おう。
求められているのなら、その答えを示そう。
「え、えっと」
さくらが、小さく頷く。
「そ、その」
息を、大きく吸う。
そして、アタマの中の引き金を、引いた。
「い、いいと、思う。すごく熱心で、いい」
語彙力なんて、全く感じられない感想。
「――そっか」
それでもさくらは、
「そっか、やったやった！　答えてくれてありがとう！　乾君！」
さくらは、心の底から笑ってくれるのだ。
真正面から、至近距離から「それ」を見て、体の内が真っ赤になっていく。チャイムが鳴って、グループがつまらなさそうに解散していく。
授業なんて、まるで頭に入らなかった。

――

学芸会当日、教室は大いにざわついていた。

それもそのはずで、
――さくらはどうしたんだ？
――せんせー、さくらはどうしたんですかー？
――何かあったのかなあ？
――もしかして、事故に遭ったとか？
学芸会が開催されるまで、あと数分。
様々な憶測が、教室全体を駆け巡っている。クラスメイトは既に衣装に着替えており、あとはさくらさえ来ればゴーゴーするのみだ。
さくらと仲が良いグループが、ひそひそ話をしている。教師も、困ったように首をかしげている。街の人Ａである太郎も、頬杖をつかせながらで「どうしたんだろう」と思う。
それから数分ほどが経過したが、未だにさくらは姿を見せない。学芸会も、そろそろ始まろうとしている。やばいんじゃないかと、クラスメートが危機感を抱きはじめた頃、
「先生、ちょっといいですか？」
引き戸が控えめに開けられ、髪が薄い教頭が頭だけを出す。一体何ごとかと、全クラスメイトが教頭を注目した。
先生が、教頭に歩み寄る。そしてそのまま、先生の耳元めがけ教頭が何かをささやき出す。爆発的に生じた緊張感が、一切の無駄口を許さない。
――長いようで短いひそひそ話が終わった。
先生は、無言のままで教壇の前に立った。
「さくらさんは、」
先生の、明らかに浮かない顔が目に入る。
「さくらさんは、残念ながら風邪にかかってしまって……今日は来られないそうです」
瞬間、教室全体が再びざわついた。マジか、本当か、そんな、あんなに頑張ったのに、大丈夫かな、あんなに頑張ってたのにね、白雪姫は誰がやる、あんなに頑張ってたのにな。
あんなに頑張っていたのに――そのセリフが、太郎の耳に何度も届く。不快めいた感情が、胸の内から湧いて出てくる。

思わず、ため息が漏れた。
「代理を決めましょう。セリフは先生が何とかしますから、誰か候補者はいませんか？」

□

数日後になって、さくらは無事に教室へ戻ってきた。何事もなく笑ったまま、いつもの挨拶を交わして、周囲から寄せられた「残念だったね」を一身に受けながら、
「ごめんっ」
黒板の前で、さくらが手と手を合わせる。周囲は何事かと顔を覗かせる。
「私のせいで、学芸会がむちゃくちゃになっちゃったりしなかった？
ほんとう、みんなを巻き込んでごめんなさいっ」
騒がしかったはずの教室から、声が途絶えた。
さくらはどうしようもないくらいに頭を下げていて、周囲のクラスメイトもさくらを注目して、それきり。太郎に至っては、口を半開きにするほかなかった。
時計の音が聴こえてくる、外からバイクの音が響き渡る、隣のクラスからばか笑いが漏れる。さくらは、微動だにしない。
――君は悪くない、風邪なんて誰だってひく。気になんかしないで、学芸会は何とか無事に終わったから。
心の中で、何度もそうリピートする。それじゃあ伝わらない。
直接言葉にしなければ、意思なんてものは認められない。
握りこぶしを作る。勇気をかき集めようとする。すうはあと呼吸する。
言、
「気にするなよ、さくら」
教室の一箇所から、声が走った。
さくらと仲良しの男子が、けらけら笑っている。
「学芸会は何とか終わったからさ、大丈夫大丈夫。それより、風邪の方

はヘーキだった？」
さくらの女友達――松尾から、気の利いた言葉が飛んでくる。
「――うん、白雪姫はちゃんと終わらせたから。気にしないで、さくら」
「そうそう、風邪ならしゃーねって」
「さくらちゃんも残念だったよね。頑張ってたのに」
それをきっかけに、クラスメイトから次々と励ましの言葉が発せられる。誰も、さくらのことを責めたりなどしていない。
顔をうつむかせたきりのさくらは、それらの言葉を耳にし続け、しばらくはそのままでいて――
「あ、あ、」
さくらが、ひどく申し訳なさそうに顔を上げて、
「ありがとう、みんな！　大丈夫！　さくらはこう見えてさくっと生きてるんだよ！　なんつってー！　さくらなんつってー！」
クラスメートが、なんだよそれと笑う。
太郎は、心の底から安堵した。

――

小学四年生になっても、特にこれといった変化は起こっていない。暇ならサガを散歩して、シシリアンライスを食べながら「今日は何もなかったよ」と家族に報告。学校では、
「おはよう、乾君！」
「お、おはよう」
さくらと挨拶を交わしあったあと、さくらは前の席にそっと腰掛けた。そうしてさくらは、周囲のクラスメイトから声をかけられる。
――何の偶然か、この前の席替えで、自分は再びさくらの真後ろの席に割り振られたのだ。
別に、さくらとは友達というわけではない。挨拶を交わし合うだけの、それきりの仲。
けれど、さくらの真後ろになれた時は、自然と「やった」と思って

いた。
「ねーさくら」
「なにー？」
松尾が、実に楽しそうに笑いながら、
「今日も記録更新するの？　やっちゃうの？　やっちゃう？」
「もちろん！　リレー選手に選ばれたからには、とこっとん頑張るよーっ」
さくらが握りこぶしを作る。男子も女子も「おおーっ」と感嘆の声を漏らす。
――流石だなあと、頬杖をつかせながらで太郎は思う。
元々運動神経が良かったさくらは、今年になってめでたくリレー選手に選ばれたのだ。その選出に文句を言うクラスメイトは一人もおらず、むしろ大いに期待された。
そうしてさくらの特訓が始まったわけだが、そのかいあって、先日の練習においては男子顔負けのタイムを叩き出してしまったのだ。
これにはクラス全体も沸いて、男子からも女子からも称賛の声を浴びた。太郎も、心の中で「すごいな」と評価したものだ。
そんなわけで、今のさくらは話題の人となりつつある。最初から張り切るつもりでいるのか、腕まくりまでしてみせた。
――今年は、報われるといいな
太郎が、ぼんやりとそう思う。

――

あっという間に運動会がやってきた。
気温もそうだが、クラスメイトそのものも実に暑苦しいことになっている。他のクラスめがけギンギラな対抗心をむき出しにしていて、事あるごとに「絶対優勝するぞ」と叫ぶ。それは他のクラスも同じで、自分以外は敵という姿勢を隠そうともしない。まさに戦争状態だった。
そんな中で、太郎は半ばやる気なく競技を潜り抜けていった。

もちろん、それを表に出すことはしない。親も見に来ているし、クラスメイトからも熱烈な応援が飛んでくるものだから、やることはやらねばならない。

早く終わって欲しいなあと、暑いなあと思いながら、何やかんやで最終競技のクラス対抗リレー戦まで生き延びることができた。

そう、クラス対抗リレー戦だ。

さくらにとっての、一番の大勝負が始まろうとしている。

グラウンドの真ん中に座りながら、リレー選手の入場を待つ。クラスごとの持ち点がそう変わらないせいか、ほぼ全員のクラスメイトがそわそわしている。

このリレーで、全てが決まる。

この後で、さくらが報われるかどうかが決まる。

気づけば、さくらのことは「他人」とは思えなくなっていた。話し相手でもないくせに、何度も挨拶をするだけの仲なのに。

――だからこそ、なのだと思う。

さくらはクラスの人気者であるにも関わらず、日陰者である自分に必ず挨拶をしてくれた。最初は戸惑うばかりだったその習慣も、今となっては人生の一部として馴染んでいる。さくらと挨拶を交わすたびに、今日一日のはじまりを実感するようにもなった。

さくらからすれば、やって当たり前だと思っているだろう。

けれど自分からすれば、その当たり前が、何だか心地よいものになってきている。

さくらは知ってか知らずか、自分の人生にささやかな実りを与えてくれたのだ。

だから、思う。ぜひ、報われて欲しいと。

『それでは、リレー選手の皆さん、出場してください』

実行委員会の、エコーがかった声。

クラスメイトが、グラウンドの隅を注目する。太郎の意識も、選手の列に向けられた。

音楽とともに、一列に並んだリレー選手が音を立てて行進してくる。誰もが無駄口など叩かず、体育座りをしたままで一同を見届けて

いる。
ここにきて、緊張感が生じてきた。
だいじょうぶ、さくらはたくさん頑張ってきた。学年でもトップの記録を叩き出した。本人曰く「夜まで練習していた」とのことだから、慢心の類にも陥っていないだろう。
いける、
その時、さくらの行進がぴくりと止まった。
リレーの列が止まり、グラウンド全体から控えめなざわめきが溢れ出る。クラスメイトの一人が首をかしげ、太郎も「どうしたんだ？」と小さく呟いて、
さくらが、その場で倒れた。
時間が止まった、と思う。
夏空の下で、ばたりという音が響いた、と思う。
誰もが何も出来ない中――さくらは、足を手で抑えながら、その身で転げ回って、何度も何度も痛い痛いと叫び続けた。
さくら！
誰かの叫び声が、時を動かした。
教師が、さくらめがけ全速力で駆けつける。続いて、客席から二人の大人が、靴も履かずにグラウンドへ飛び込んでいった。
とあるクラスメイトは、狼狽する。とあるクラスメイトは、さくらめがけ駆けつける。とあるクラスメイトは、必死に耳を塞いでいる。
太郎は右往左往した後に――勢いのままで立ち上がり、半ば考えなしにさくらのもとへ駆けつける。出来ることなんてまるで思いつかないけれど、せめて言葉くらいは、
そうして、足を抱えたさくらの元に辿り着いて、
さくらは、ひどいくらいに、泣いていた。
涙と鼻水混じりに、「なんで」が聞こえてくる。一度だけじゃなくて、二度も、三度も。
周囲の大人達が、数人のクラスメートが、両親らしい大人二人組が、必死になってさくらへ声掛けをしている。だというのに、さくらの声だけが鮮明に耳に届いてくる。

たぶん、あまりにも印象的だったからだと思う。さくらの口から引きずり出されたその言葉は、まちがいなく、魂の叫びだったから。
こんなのひどい、太郎は思う。
何とかしたい、太郎は強く思う。
けれど、何と言って良いのかなんて、まるで分からなかった。ろくな努力をしたこともない自分が、さくらに投げかけられる言葉なんて、まるで思いつかなかったから。
何処かからか、担架が運ばれてきた。近くにいたクラスメイトがこぞって離れていき、大人達の手でさくらが担架の上に運ばれていく。太郎は、その一連の流れを見守ることしかできない。
「――ごめんなさい」
確かに聞こえた。喉から絞り出したような、さくらの声を。
どうして、そんなことを言うのだろう。さくらは何も悪くないのに、それよりも自分のことを考えて欲しいというのに。
結局、何の言葉もかけられないままで、さくらは保健室まで運ばれていった。
その後で、何事もなかったかのようにリレーは再開された。順位は二位だった。

――

運動会が終わった後でも、親から「頑張ったな」とねぎらいの言葉を投げかけられても、太郎の機嫌は少しも良くはならなかった。
夕飯を食べ終え、すぐにでも自室に戻り、ベッドの上で仰向けに転がる。見慣れた蛍光灯が何だか眩しく見えて、リモコン操作で電気を消した。
何も見えなくなる。
ほっとするように、ため息をつく。
そして、真っ先にさくらのことを考える。
さくらは間違いなく、今日という日のためにたくさん頑張ってきた。女子というハンデすら乗り越えて、学年トップの記録すら叩き出

せるほどに。
それなのに、今日のあれは何だ。さくらが何をしたんだ。
さくらとは挨拶を交わし合うだけの仲だが、だからこそ、こう思う。
ため息。
さくらは、理不尽に怒っていいはずなのだ。それなのにさくらは、ごめんなさいと告げた。
最初は、何を言っているんだと思った。けれど後になって、「ああ」とわかった。
――自分のせいで、こんなにも迷惑をかけてしまってごめんなさい。
さくらは、そう言ったのだと思う。
だってさくらは、去年の学芸会でも同じようなことを口にしていたから。
腕を、目の上に置く。
なんて、優しい人なんだろう――今更か。こんな自分のことを、認めてくれるような人だから。
確かに、さくらは今回も結果を出せなかったと思う。
けれど、さくらは確かに頑張った。結果を出すために、ひたむきに努力し続けてきた。この事実は、同じクラスメイトとしてよく知っているつもりだ。
僕は、そんなさくらのことを認めているんだ。
努力もロクに出来ない男だからこそ、そう思うんだ。

――

数日後、さくらは松葉杖を片手に教室へ戻ってきた。
有無を言わさず、クラスメイトたちがさくらの元へ駆けつける
「だ、大丈夫だったか？　さくら」
「大丈夫大丈夫、あと数日もすれば完治するってお医者さんも言ってたし」
けろりとした口調で言いながら、ぺろりとさくらは笑う。そんなさ

くらを見て、クラスメイトたちの緊張感が一斉に抜けていく。
「はー、それなら良かったけどよ……」
「心配してくれてありがとう。……私の方こそ、ごめんなさい。みんなに迷惑をかけちゃって」
松尾が、いやいやいやと首を横に振るい、
「そんなこと言わないで。さくらは何も悪くないよ」
「でも、順位が……」
「気にしない気にしない、二位でも上等だよ上等」
「そうそう。むしろ、さくらちゃんの方が可哀想っていうか……あれだけ頑張ってたのに」
太郎は、小さく頷く。
リレーの結果は、個人的にはどうだっていい。特に成績に響くわけでもないし、そもそも二位という時点でけっこう上手くいったと思う。
それよりも心配なのは、さくら本人のダメージだ。
だってさくらは、あの時、
「ああ――うん！　私なら大丈夫、来年に向けて頑張るから」
「え？」
「今年は失敗しちゃったけど、来年は上手くやれるようにするよ。大丈夫大丈夫、シュバババーッて走るコツは掴めたから、来年こそはバリバリーって活躍してみせるよ！」
間。
「そ、そう？　ならいいけど……無理、しないでね？」
「大丈夫大丈夫！」
そうして、ぎこちなくもさくらは席についてみせる。
周囲のクラスメイトは、さくらの勢いの気圧されでもしたのか、どこか苦笑いをこぼしていた。
まあ、無理もないよなと思う。
また、怪我をしてしまったら大変だ。
たぶん、クラスメイトの反応こそが正しいのだろう。けれど太郎は、さくらの後ろ姿を見て、つい、

「あ、あの」
「あ、何かな？　乾君」
あえて何も考えずに、勢いのままで、
「ら、来年は、その、頑張って。期待、してる」
言った。
思うと、自分から声をかけたのは初めてな気がする。あまりにたどたどしくて、気の利いた事なんて一つも言えなかったけれども、伝えたいことは伝えられた。それは断言できる。
――だから、さくらは笑ってくれているのだと思う。
「ありがとう、乾君！」
さくらは、本当に嬉しそうにしながら、ピースしてくれた。

――

しかし、世界というやつはそう簡単には変わってくれないらしい。
学芸会だが、本番当日になってさくらが腹痛を起こしたり、台風がやってきて急遽中止になったりと、さくらがステージの上で輝く日は来なかった。
そしてリレーだが、さくらの出番がやってきては、突如の肉離れが発生「し続けた」。三年連続ということで、教師の対処が俊敏になっていったのが実に印象深い。
さくらの方も段々慣れていったのか、四年の頃は号泣して、五年の頃は小さく泣きじゃくって、六年になるとため息をつくだけになっていた。
流石にもう、慣れてしまっていたのだろう。
「――ごめんなさい！　肝心なところで、みんなに迷惑をかけちゃって……」
それでもさくらは、皆に謝り続けた。ふてくされることなく、誠心誠意を込めて頭を下げっぱなしでいた。
だからか、さくらのことを邪険に扱うクラスメイトは皆無だった。それがせめてもの、救いだったと思う。

そして世界というやつは、そう簡単には変わらないものであるらしい。

「おはよう、乾君！」

「おはよう」

小学校を卒業するその日まで、さくらはずっと、自分に対して挨拶をし続けてくれた。

僕は、この人のことをずっと忘れないと思う。

二話

中学生になって、少しだけ変化が訪れた。
乾太郎という男は相変わらずぼっちだったし、生きているだけで親から愛され続けたし、世を恨んだりも楽しんだりもしていない。変わったことはといえば、さくらとは別の教室に割り当てられた事ぐらいだ。
寂しい、とは思わない。ただ時折、上手くやれているのかなと考えることはある。
小学校ではツイてないの連続だったのだ。せめて、中学校では青春を謳歌して欲しいものだと、太郎はらしくもなく願っている。
そうして早朝から教室に入り、数人のクラスメイトと目が合う。ただ一人として、友人と呼べる者はいない。
――ただ、これだけは言う。
「おはよう」
「おお、おはよう、乾」
何事もなかったかのように、太郎は席につく。適当に教科書の一冊を引っ張りだし、適当に教科書の1ページを目にする。

□

昼休み。
太郎は何の感慨もなさそうな目つきで、教室をゆっくり見渡す。お喋りに興じる女子二人に、休日の予定を立てている四人グループ、読書をしている男子、机の上で眠りこけている女子と、それぞれがやりたいことをやっている。
暇だ、と思う。
早く授業が始まって欲しい、とすら思う。
時計を見てみれば、次の授業まであと二十分ほどの間が空いている。
いつもなら居眠りをしているか、意味もなく教科書を読んでいる

か、校内をふらついているか――席から、ゆっくりと立ち上がる。
今日は、何となく散歩してみるか。
背筋をきっちり伸ばしながら、教室の出入り口を潜り抜けていく。誰も、そんな太郎のことを気にも留めない。
難なく廊下から出てみれば、カップルらしき二人組が前を通り掛かる。一瞬だけ羨んではみたものの、すぐに「関係ないな」と思いながら、適当に歩む方向を決めて、ろくに考えもせずに校内を歩き回る。
そんな間でも、生徒たちの姿がよく伺えるのだ。誰も彼もが楽しそうな顔をして、時には小突いたりする奴もいる。本人たちからすれば「たったそれだけのこと」だろうけれど、太郎からすれば一生かかっても出来ないことだ。
他人との接し方が分からない、けれども他人嫌いではない。
これでは、孤高にすらなれない。
中1の分際で、将来が心配だなと思う。
1―D前を横切ろうとした時、引き戸が音を立てた。
太郎が「あ」と声を漏らし、
「あ」
「あっ」
引き戸を開けた生徒の顔を見て、思わず大きめの声が出た。
「あ、久しぶりだね、乾君。こんにちはっ」
「え、あ、」
源さくら。
数カ月ぶりに、その顔を見たと思う。距離だって、そう離れてはいない。
動揺のあまり、上ずった声しか出せない。これがもし、名も知らぬ生徒か何かだったら、何事もなかったかのように逃げ出していただろう。
けれど、自分の目の前にいるのは、他でもない源さくらだ。
自分に、礼儀というものを教えてくれた人だ。
「こ、こん、こんにちは」
「うん、こんにちは」

体を強張らせてまでの、渾身の一言だった。
それを、さくらは笑顔で返してくれた。
「乾君は今、何してたの？」
「え、あ……散歩、かな」
「そうなんだ！　いいね、校内で散歩っていうのも」
「そう、かな」
「うんうん」
屈託もなく、うんうんと頷かれる。
「み、源さんは何を？」
「あ、私？　私は水を飲みに行こうかなって」
「水？」
「うん。勉強ってエネルギーを使うから、ここ最近は水ばっかり飲んでるの」
「へ、へえ。勉強」
「そう！」
さくらが、ぐっと握りこぶしを作る。
「私、Z高校に向けて勉強を始めたんだ」
ボンクラ気味だった脳ミソに、静電気が走る。
「Z高校って、あの？」
「うん、あの」
その名前は、太郎ですら知っている。
Z高校とは県内屈指の名門校で、ここに入れれば就職には困らないだの、威張れるだの、入って損はないだのと、とにかくポジティブシンキングな評価がついて回る高校なのだ。
もちろん、太郎からすれば逆立ちしたって入学は出来ない。
けれどもさくらは、その領域に足を踏み入れようとしている。何の疑いもなく、目をきらきらさせながら。
「だからこの三年は、勉強に費やそうと思って」
「す、すごい」
「えへへー」
思う。

これまでのさくらは、何の努力も報われない人生を送り続けてきた。それなのにさくらは、努力というやつに絶望したりせず、叶うかどうかも分からない目標まで立てているのだ。
自分には、一生できそうにもないことだ。
だからこそ太郎は、振り絞ってまでも言う。
「み、源、さん」
「なに？」
ひと呼吸、
「がん、ばって」
「あ……うん！　ありがとう、乾君！」
――そうしてさくらは、水飲み場まで立ち去っていった。
太郎は何となく、その後姿をしばらく見届ける。

――

休み時間。1―Dの前を通り過ぎようとした時、太郎は「また」見た。ひたすらにノートと戦っているさくらの姿を。
そう、まただ。休み時間、昼休み、更には放課後も、さくらはずっと勉強に明け暮れている。さくらのことだから、本当に三年間はこのままぶっちぎるつもりでいるのだろう。
――何をそこまで。
そう思って、何となく「ああ」と思った。
さくらはきっと、今度こそ勝者になりたいのだと思う。小学校の頃は散々だったものだから、今度こそは揺るぎない成功を得たいのだろう。
――何度も頑張れる人なんだな。
一度きりの努力すら、自分にとっては難しいというのに。それなのにさくらという人は、何度も何度も努力積み重ねることが出来るのだ。幾度も幾度も、結果をへし折られようとも。
太郎は、らしくなく思う。あの人こそ、報われるべき人だと。

――

中学生活も三年目を迎え、あっという間に試験日が降りかかってきた。

太郎は勤勉というわけではないが、かといって極端な馬鹿というわけでもない。少なくとも赤点を取らない程度の成績は保ち続けていたし、先生からも「R高校ならいけるだろ」というお墨付きもいただいている。

Z高と比べるとランクはガク落ちするが、別に一流を目指しているわけでもなし、どこかに合格出来ればそれでいいやと太郎も思っている。

そんなわけで、太郎は試験会場まで歩んでいた。体を震わせながらで。

いくばくかの保証があるとはいえ、やはり試験というものは緊張してしまう。一歩進むごとに、一つの不安が腹の底から芽生えてくる。忘れたらどうしよう、シャーペンを落としたらどうしよう、漢字を書けなかったらどうしよう、試験会場まではこの道程で良いんだよな――

頭をぶんぶん振るう。ここまできたからには、もうやるしかないのだ。

そうして、横断歩道が目に見えてきた。あそこを通れば、試験会場まで一直線だ。

歯を食いしばり、握りこぶしを作り、深呼吸して――

そして、太郎は見た。横断歩道の向こう側、老婆を背負っている源さくらの姿を。

「み、源、さん」

「あ――乾君、おはよう」

重いだろうに。それでもさくらは、何でもないように笑って、挨拶をする。

「お、おはよう……そ、それで、その」

「あ、ああ。おばあさんね、道端で倒れていて……それで、近くの病院

まで運んでいるんだ」
「そ、そう、なの？」
さくらが、「そうなの」と頷く。未だ、笑みを絶やさないまま。
――何をやっているんだ自分は。
こういう力仕事は、男がやるものだろうが。
「み、源さん。そ、それなら僕が」
「え」
「い、いいから。僕なら大丈夫だから」
言うべきことは、言ったはずだ。
「――ううん、私は大丈夫。それよりもほら、乾君も試験でしょ？　早く行ったほうがいいよ？」
それなのに、さくらからはこう返されてしまった。
「で、でも」
「私は大丈夫だから。うん、気を遣ってくれてありがとう、乾君」
そして有無を言わさず、さくらは太郎の横を通り過ぎていった。
振り向く。
さくらは、何の迷いもなく病院へ歩んでいく。三年ぶりの栄光よりも、誰かの命を救うために、その身を差し出している。
――太郎は、心の底から思う。
神様が見ているのなら、ぜひ、源さくらを報わせてほしい。あんな優しい子が救われないなんて、うそだ。
さくらの後ろ姿が、遠いものになっていく。力なく肩で呼吸した後で――太郎は、横断歩道を渡る。

――

無事に志望校へ合格し、長い長い入学式を無事に乗り越え、あくび交じりに教室へ足を踏み入れる。
――やはりというか、中学時代とそれほど代わり映えはしない。けれど、それがかえって気が楽というか。
雑談と期待に盛り上がる生徒たちをよそに、太郎は適当な席に腰か

ける。席の割り振りは、少し経ってからだ。
はあ。
ここまで来るのに、何だか長かった気がする。ここへ入るのにそれなりの勉強はしたし、試験だって緊張しなっぱなしだった。合格を確認した時は、親ときたら一晩中大騒ぎしていたっけ。
背もたれに、身を預ける。
ふと、思い出す。
さくらは、無事に合格できただろうか。人助けをしたのだから、報われて欲しいものだけれど――
「あ、乾君」
物思いが、ぶっつりと断ち切られた。
「同じクラスだったんだねー。今年もよろしくね」
「あ、あ、」
太郎の目の前に、源さくらがいてしまった。
不意な現状に、言葉が上手く回らない。何を言うべきか、気の利いた一言でも口にするべきか、頭の中で何度も何度も考えて、
「う、うん。よろしく、源さん」
「うん」
そしてさくらは、前の席へゆっくりと腰かけた。
――さくらの存在に気づいたのだろう。中学時代からの同級生だった女子が、「あ、さくらじゃーん」と近づいてきた。
「おひさー、でもないか。同じ高校だったんだねー」
「うん、まあねー」
「……てことは？」
「あはは。まあ、そゆこと」
「そっかぁ」
さくらは笑っていた、どこか力なく。
――太郎は、ため息をつく。
なんでだよ、
なんで。
――

「おはよー、乾君」
「おはよう」

高校に進学してからというもの、やることは全く変わらない。
笑顔で親と過ごし、勉強もそれなりにこなして、苦手な体育を乗り越えながら、けだるげに休み時間をやり過ごす毎日。自分は一生このままなのかなと、他人事のように思う。
そして、頬杖交じりで覗き見える光景はといえば――ぐったりと席に身を預けている、さくらの姿だ
相変わらずの人気者だし、部活の勧誘もしょっちゅうやってくるが、さくらはひとたびも関心を向けない。ただただ、机の上に横たわるばかり。
――休み時間になって、
「ねえさくら、あんた体育得意でしょ？　水泳部に入ろうよー」
うつ伏せ気味だったさくらが、クラスメイトに首だけを向けて、
「あ、あー……いいよいいよ、私はこのままでいい」
「えー？」
「いーの、ろくなことにならないから」
「そお？」
「そお」
「うーん……まあ、気が向いた時にでも、来てみてよ」
「うん」
そうして、クラスメイトが去っていく。さくらが、力なく「あー」と唸る。
その様子を見て、太郎は「だろうな」と思う。
彼女は今まで、あまりにも報われなさすぎた。今までは気丈だったさくらも、志望校から落ちたことによって遂に紐が切れてしまったのだろう。
額に、手を当てる。
中学時代に、さくらは言った。この三年間は、勉強に費やすと。

さくらのことだ、本当にそうやって生きてきたのだろう。目標へ向けて、文字通りその身を捧げてきたはずだ。
それなのにさくらは、当日になって人助けを優先してしまった。できてしまった。
そのせいで、時間に遅れでもしたのだと思う。或いは、疲れでもしたか――いずれにせよ、さくらは志望校に落ちた。またしても報われなかった。
とても、優しい人なのに。
今日も挨拶を交わしてくれたあの子に、何か言ってあげたい。
けれど、自分ごときの慰めなんて煽りにしかならない気がする。
クラスメイトが、笑った。
さくらは、やるべきことをやれる人だ。それなのに、降って湧いた不運がさくらの積み重ねを台無しにしてしまう。
全力でやってみて、勝てばそれでよし、負けてしまったとしても「次は頑張るぞ」と奮起は出来るはずだ。さくらはそういう人だ。
さくらの真に不幸なところは、「機会すら与えられない」という点だ。
これは堪える。勝ち負け以前に、実力すら発揮出来ないままで本番の時を流されてしまうのだ。努力した分だけ、なおのこと腹が立つだろう。
それを何度も何度も味わわされれば――そりゃあ、人生なんてクソどうでもよくなる。
ため息。
さくらとは、去年も今年も挨拶で繋がってきた仲だ。それだけじゃなく、これまでに何度か、さくらの「いいところ」を目にしてきた。
そんなさくらに、何かできれば。
けれど、ただ生きているだけの自分の言葉なんて、これっぽっちも響きはしないだろう。
今はただ、せめて、さくらの後ろ姿を見守るしかない。

――

それからというもの、太郎はまたしてもさくらの後ろで座ることになった。
家と学校の距離は少しだけ遠くなったものの、あくまで少しだ。むしろ授業開始までの時間が短くなって、丁度いいとすら思う。
友達付き合いに関しては、やはりこれまた皆無だ。何を今更だから、悲観ぶったりはしないのだけれども。
――高校生活になって、変わったことはといえば、
「おはよう、松尾」
「お、おはよーっす、乾」
自分から、挨拶をするようになった。
だからか、クラスメイトからはとくべつ嫌われたりなどはしていない。そのお陰からか、体育教師から「二人組になってー」と言われようが、自然とクラスメイトが誘ってくれたりもする。
無味無臭の学校生活を送っていることに変わりはないが、少なくとも陰鬱としていないだけマシだ。
そしてさくらはといえば、机の上で頬杖をつく日々が続いている。最初は部活の勧誘もあったのだが、何度も何度も流していくうちに、それもなくなっていった。
ただ勉強をして、普通に体育を受けて、友達とドラマの話なりをして、放課後になればすぐに帰宅する。勉強熱心だったさくらの姿は、もうどこにもない。
そんなさくらを見て、太郎は、「おせっかい」をしようと思った。
――さくらが、教室に入ってくる。太郎が、おそるおそるさくらに視線を向けて、
「おはよう、源さん」
「あ、」
ほんのちょっとの間を置いて、
「おはよう、乾君」
さくらが、にこりと笑ってくれた。
――さくらは自分に、挨拶の大切さを教えてくれた。だから、嫌わ

れ者にならずに済んでいる。
少なくとも、さくらは自分のことを変えてくれた。何も成してないなんて、そんなことはない。
自分に出来るのはここまでだけれど、これだけは主張したかった。
それでさくらが笑ってくれるのなら、自分はいくらでも挨拶をしよう。

――

高校一年になって、はやくも半年が過ぎた。
やはり太郎の学園ライフに、劇的な変化などは訪れていない。なるだけ挨拶を交わし、たくさんの授業を潜り抜けて、放課後になればすぐに帰る。これの繰り返しであるから、まるで変わりようがないのだ。
たぶん、一生このままなんだろうなと思う。それでも、派手に嫌われたりするよりはマシであるはずだ。
そんなふうにして、太郎は今日も生き残っている。
源さくらはといえば、ここ最近になって、よく笑うようになった。
「さくらー」
「なにー？」
休み時間。
今もさくらと付き合い続けている松尾が、さくらの机にまで近づいてくる。
「今日さ、時間があったらどっかに遊びに行かない？　せっかくの金曜だし」
「あー」
さくらが、松尾に対して両手を合わせる。
「ごめんっ。今日もダンスの練習をするつもりで……ね？」
そう言うさくらは、机の中から黒いＣＤケース――アイアンフリルのジャケットを、松尾めがけ掲げる。
「おー、やるねえ。やっぱ本気でアイドルを目指してるんだ」

「うん！　アイアンフリルのような、きらめくアイドルになるんだ。絶対に！」
　松尾が、ほほーとニヤつき、
「ま、目標があるのはいいこってす。……しっかし、アイドルか。難しそーね」
「うん……」
　そこは否定できないのだろう。さくらはうつむき、
「でも、アイアンフリルは、水野愛は言ってた」
　すぐに首を整え、すぐに笑顔になる。
「失敗をしてもいい、後悔をしてもいい。だからこそ、次に繋げられるんだって」
　後ろの席からでは、さくらの横顔しか伺えない。
　それでも、太郎はわかる。さくらは、いつも通りの前向きさを取り戻せたのだと。
「その言葉を聞けて、思ったんだ。こんな失敗ばかりの私でも、諦めなければ、今度こそ生まれ変われるんじゃないかなって」
「……へえ」
「私は絶対に、アイドルになるよ。今度は私が、みんなに笑顔を与えたい。アイアンフリルのように」
「そっか。うん、いいんじゃないかな」
　テレビ事情には疎い太郎でも、アイアンフリルの名前は聞いたことがある。
　今をきらめくトップアイドルグループで、どのメンバーにも熱心なファンがついているのだとか。クラスメイトの口からも、そういった話が飛んでくることがある。
　どうして、ここまでの人気があるのか、正直よく分かっていなかったのだが――今のさくらを見て、心の底から納得した。
「じゃ、アイドルになったら優先券ちょーだいな」
「あはは、いいよー」
「っしゃー」
　その時、チャイムが鳴った。

「あ、時間だ。ちゃおー」
「ちゃおー」
アイドルには、アイアンフリルには、人を立ち直らせる力がある。その事実を、太郎は今ここで実感した。
――みんなに笑顔を与えたい
それでもやっぱり、さくらは「他人」のことを忘れない。らしいなと、太郎は微笑し、
「あ」
さくらが、机の中から教科書を引っ張り出そうとした時だろうか。さくらの手が、ついCDケースにぶつかって――固い音が、床から鳴り響く。アイアンフリルのCDジャケットが、太郎の足元に落ちていた。
一瞬だけ、触っていいものかと迷う。
いや、挨拶をする仲じゃないか。
そう開き直って、そっと、CDケースを拾い上げ、
「これ」
「あ、」
さくらは一瞬だけ、意外そうに目を丸くする。
――そしてさくらは、こんなにも近くから、
「……ありがとう、乾君」
僕に向けて、太陽のように笑ってくれた。
――何も考えられないまま、CDケースをさくらに渡す。さくらが、小さく頭を下げる。
「……あ、あの」
「うん？」
衝動的に、使命感めいたものが芽生えたのだと思う。
熱に浮かされたまま、けれども言うべき言葉は決まっていた。
「そ、その……アイドル、がんばって。僕も、応援するから」
ひどくたどたどしかったけれども、言いたいことは全部口にできた。
――さくらは、

「あ……ありがとう！　うん！　わたし、頑張るよ！」
こんな僕の言葉に、笑顔で応えてくれた。
授業が始まったが、ぜんぜん頭に入らない。アイアンフリル、さくら、さくらの笑顔、この3つが頭の中でずっとずっと回り続けている。
――――

「太郎」
味のしないシシリアンライスを口にしている最中に、父から名前を呼ばれた。
ついびっくりしてしまいながらも、父の方へ目を向ける。
「どうした。今日は何か、あったのか？」
「え……ま、まあ、うん、まあ」
何もない、と嘘をつくことだって出来た。けれど太郎はあえて、「ある」と返事してしまう。
たぶん、否定なんてしたくなかったのだと思う。そうしてしまえば、大切な感情が取り消しになってしまうような気がして。
「なんだ、友達と面白いことでもしたのか？」
「あ、いや、そういうわけじゃないんだけれど」
これは本当だ。
――父は、ほほおと笑って、
「好きな人でも、できたか？」
それは本当だ。
自分はきっと、みっともない顔をしてしまっているのだろう。父も母も、実に実に楽しそうな表情を浮かばせている。
太郎はただただ、黙秘権を貫くしかない。
「まあ」
父が、湯気の立った味噌汁を口にする。
「相談があったら、いつでも言うんだぞ」
「はいはい」
あえて、半ば投げやりに返事をしてやる。
それでも父と母は、いつまで経っても笑顔を崩そうとはしない。

やるべきだろうか。太郎は、今になって心底悩んでいた。
これから自分は、さくらに対して一世一代の大勝負を仕掛けようとしている。前の席に座っているさくらを凝視しながら、机の中に手を突っ込みつつ。
手順はこうだ。自分からさくらに声をかけて、出すモノを出して、正直な感想を述べて、あとは何やかんやで話を繋げられれば「勝ち」。
それだけだ。
もちろん、とてつもなく難しい。
散々シミュレートしたくせに、今になって不安が積りに積もってくる。失敗したらどうしよう、下心を見抜かれたらどうしよう、嫌われたらどうしよう、クラスに知れ渡ったらどうしよう――
数分考えて、やっぱりやめようかなとさえ思う。他人付き合いを面倒くさがっていた自分に、いっちょまえの恋をする資格なんてあるはずがないのだ、とすら思う。
口から、マイナス思考のため息を吐く。
意味もなく、うつむく。
さくらは明るく、元気よく、これから歌って踊れるようになる女性だ。対して自分は、ただただそれなりに生きてきただけ。
明らかに釣り合わない。下手に接触しようものなら、さくらに迷惑をかけてしまうかも。
クラスのどこかで笑い声が響いてくる、アイアンフリルについての語り合いが聞こえてくる、「乾君」と呼びかける声が聞こえてくる、
「乾君」
目から覚めたように、首をがくりと上げる。
「どうしたの？　何か、凄く元気がないようだけれど……」
いつの間にか、さくらが振り向いていた。太郎に対して、しかも声までかけて。
対して太郎は、「あ」とか「あ」とか「いや」としか口に出来ない。

「大丈夫？　無理しない方がいいよ？」
首を、横に振るう。
そして、さくらのきょとんとした顔が、視界いっぱいに映り込んだ。
「それとも、何か悩んでるの？」
太郎は未だに、口ごもんだまま。けれどもさくらは、そんな太郎に対して、
「私で良かったら、相談に乗るよ？」
まるで友達のように、笑いかけてくれる。
――それだけでもう、だめだった。
自分のものにしたいという邪な感情が、止まらなかった。
「あ、いや、」
いや、じゃない。
太郎はすかさず、かつゆっくりと、机の中から「それ」を取り出す。
「これ、聴いてみたんだ」
机の上にソレを置いた瞬間、さくらの顔が輝いた。
「これ、アイアンフリルの！　どうだった？　どうだった？」
前のめりになるさくらを前にして、太郎の体温はもはや爆発寸前だった。
けれども、少しも嫌ではない。
「えっと、凄く良かった。元気が出てくる、というのかな……聞き心地が凄く良い」
「でしょでしょ？」
だって、つい笑ってしまえているから。
さくらといえば、まるで自分のことのように二度頷き、同意してくれている。
「音楽のことはよく知らなかったんだけれど、これは良いと思う」
「うん、いいよねえアイアンフリル。私も、家の中ではずっとかけっぱなしだよー」
「僕もそう。音楽をかけながら何かをするのって、こう、いいよね」
「ねー、いいよねー。私なんて、つい創作ダンスしちゃう」
「へえ、いいね」

「まだ下手だけどね」
　さくらが、えへへと笑う。
「でもいつかは、アイアンフリルのようになりたいなあ」
「なれるよ」
　間髪入れず、本能的に答えた。
「なれる、かな？」
「うん、なれると思う。だって源さんは、頑張れる人じゃないか」
「そ、そう？　まあ、肝心なところで持っとらんかったけど……」
「でも、今度は上手くいくとおも、」
　首を、横に振るう。
「今度は上手くいくよ。僕も、その、応援するから」
「本当!?」
　さくらの笑顔が、もっと明るくなる。
　太郎のすべてが、鷲掴みにされた。
「ありがとう、乾君！」
　また、その言葉を聞けた。
「うん。よーし、乾君のために、もっと頑張らないといけないねー」
「無理はしないでね。怪我とかしたら、大変だし」
「うん、そこは気をつけてる。経験もあるしね」
　さくらが、苦笑いをこぼす。
　今のさくらにとって、過去の失敗は単なる思い出でしかないのだろう。それを知れて、太郎は小さく頷けた。
「……源さん」
「なに？」
　言おう。
　持っていないと思い込んでいるさくらに対して、遠回しでささやかな励ましを。
「源さんのお陰で、こんなにも良い曲を知ることが出来たんだ」
「え、私？」
「うん。源さんの話を聞いて、アイアンフリルに興味を抱いて。それで、ね」

「本当？」
「ほんとう」
「そっかー……それはいちファンとして、うれしいなあ」
「うん」
さくらは、間違いなく持っている。
「ありがとう、源さん。良い曲を教えてくれて」
人を、変えてしまえるほどの力を。
「――こちらこそ、聴いてくれてありがとう。乾君」
僕を、恋に落としてしまう笑顔を。
チャイムが鳴る。たぶん、授業の内容なんて頭に入らない。

三話

「おはよう、乾君」
「おはよう、さくらさん。……どう？　調子は」
「いいよいいよー、ダンススクールの講師もにっこりだった」
「やったね」
　あれから、さくらとはちょくちょく話し合う関係になった。
　アイアンフリルという共通の話題もそうだが、やはり後ろの席というポジションは強い。こうして声掛けをしても、周囲のクラスメイトが冷やかしたりはしない。
　――いずれは、からかわれるような仲にはなりたいのだけれども。
「んー、これなら」
　さくらが、ぐっと握りこぶしを作り、
「来年のオーディションでは、いいところまでいけるかも？」
「ああ。アイドルの、だっけ？」
「そうそう、ＺＬＳ社主催の。やっぱり人が集まるらしくって、激戦区だって」
　さくらから聞いた情報によると、ＺＬＳ社とは、サガに存在する大手オーディション事務所であるらしい。
　サガでアイドルになりたければ、まずはＺＬＳ社を通過すること。こう言われているぐらいには、名前が売れているのだとか。
　サガという世界は何度も散歩したものだが、ＺＬＳ社のことは少しも知らなかった。やはり人間、知ろうと思えなければ何も入ってこないものであるらしい。
　――激戦区と聞いて、太郎は「へえ」と声が漏れる。
「このサガにも、やっぱり、輝きたい人は多いんだね」
「うん。たぶんみんな、私と同じくらい……ううん、私以上に頑張っている人が多いと思う」
「そうかな？　さくらさんは、いい感じに練習を積み重ねていると思うよ」

「そう思いたいけど、やっぱり慢心しちゃいけない。もっと頑張らないと」
「ま、待った」
　そこで太郎は、あえて口を挟む。
「さくらさんは十分頑張っているから、時には休んだりすることも大事だよ」
「ええ、そうかなあ？」
「そうそう」
　珍しく強気に、太郎は頷く。
「練習もいいけど、そればっかりだと、やっぱりまずいよ。本番にちゃんと参加できるように、休みを挟まないと」
「……んー」
　一概に否定しないあたり、さくらも分かってはいるのだろう。ましてや太郎とは小学校からの付き合いだから、リアリティのある証言としてよく受け入れてくれている。
　さくらはうんうん唸り、腕を組み、「そうだね」と微笑して、
「乾君の言う通り、だよね。うん、私もそう思う」
「うん。たくさん頑張れるのは、さくらさんの美点だけど、ね」
「ありがとう。そだね、本番までコンディションを整えられるように、ほどほどに遊んでばりばり練習するよ」
　太郎から、安堵の鼻息が漏れる。
　さくらは昔から、目標へ頑張りすぎる傾向がある。リレーにしろ、白雪姫にしろ、試験にしろ、とにかくそうだ。
　そうして報われないのも、源さくらという人の特徴ではある。けれど怪我とか、体調不良とか、そういったものは何とかして予防は出来るはずなのだ。だから太郎は、なけなしの男気を全て使ってまで、さくらの努力に反論してみせた。
　嫌われたらどうしよう、そうは思った。けれども、異論を口にしたかったのも事実だ。さくらには、今度こそ報われて欲しいと考えているから。
「ありがとう、乾君。君がいなかったら、危なったかも」

「い、いや、その……僕の方こそ、あれこれ言ってごめん」
「ううん！　乾君は正しいことを言ってくれただけ、謝る必要なんてないよ！」
「そ、そう？　それなら、よかった」
「うんうん」
　朝の教室は、ずいぶんと静かだ。笑い声の一つも聞こえてはこない。
「さ、さくらさん」
「なに？」
「その、」
　呼吸する、もう一度息を吸う。空っぽになった男気を、再び回収する為に。
　さくらとは、少しばかり会話を交わし合う程度の仲だ。それ故に、これ以上モノを言うのは、いくらなんでも馴れ馴れしすぎるとは自分でも思う。
　でも自分は、さくらに恋してしまったのだ。
　恋とは、無謀を繰り返さなければどうにも転ばないのだ。
　太郎は、最後の呼吸をして、
　そして、
「えっと……成功談とか、失敗談とか、僕でよかったら聞くよ。何か吐き出したいこととかがあったら、うん」
　さくらには、アイドルという最高の夢を掴んで欲しい。
　それが、乾太郎の願いだった。
「乾、君」
「うん」
「……いいの？」
「うん。僕は、さくらさんの夢を、応援したいから」
「そっか……」
　さくらが、小さくうつむく。訪れた沈黙に、太郎の心中が不安へ染まっていく。
　さくらは、しばらくはそのままでいて——

「――乾君」
目が、合った。
「君はとても、優しい人なんだね」
やっぱり僕は、この人のことが好きだ。
源さくらと、結ばれたい。
それが、僕が初めて抱いた夢だった。
「じゃあ今日のダンスが終わったら、明日は……休みだし、どこか遊びに行くかな」
「うん、いいんじゃ、ないかな」
「だね。……あー、何して遊ぼう。ここ最近はレッスンばっかりしてたからなぁ」
やはり、妥協というものをしてこなかったのだろう。さくらが、気まずそうに苦笑いする。
――胸の内で熱くなっていく夢は、いまはそっとしまっておこう。
「さ、散歩はどうかな？　気分転換にはもってこいだよ」
「おお、散歩！　それはいいかもしれない……うん、そうしようかな、うんっ」
笑顔が眩しい彼女が、アイドルになれるその日まで、僕はずっと待ち続けよう。
さくらがアイドルになれたら、万が一なれなくても――いや、絶対になれる。
そうなったら僕は、さくらさんに想いを伝えるんだ。

――

送信者：源さくら　受信者：乾太郎
『明日からオーディションということで、ぜんぜん眠れません。といっても、何とかして寝るけど。
本当にドキがムネムネしてるけど、不思議と嫌な感じはしないの。自信があるからかな？　サクラサク予感がするからかな？
なんつって、さくらなんつって！

でもクラスメイトのみんなも応援してくれてるし、乾君も話し相手になってくれたから、なんていうのかな……そう、一人じゃない！みたいな？

まあ、あれです。今まで付き合ってくれて、本当にありがとう！アイアンフリルのファンになってくれて、本当にありがとう！

これを打っていくうちに、なんだかいい感じに眠くなってきました。それじゃあ明日、がんばってきます！』

ベッドの上で寝転がりながら、携帯を胸元に置く。

ぼうっと天井を眺めながらで、太郎は、時の流れの早さをぼんやり実感していた。

気づけば高校二年生になっていて、あっという間に雪も溶けきって、何やかんやでオーディション前夜にまで差し掛かっていた。

本当、これまで色々なことがあった気がする。

さくらはダンスと歌に励みながら、時には舞い上がったり落ち込んだりもした。たまに愚痴や弱音を語られたりもしたが、太郎からすれば何でもどんとこいだ。それで気分転換になるのであれば、恋する太郎からすればこれほど至福なことはない。

とにかくさくらには、最高のコンディションであり続けてほしかったのだ。

満足げに、口元を曲げる。

このメール内容からして、たぶん今も、さくらは笑えているはずだ。

自分も、微力ながらさくらの役に立てたと思う。そのかいあってか、親からは「最近、いい顔をするようになったな」と言われるようになったし。

――やっぱりさくらさんは、人を変える力を持ってるよ。

力なく、あくびを漏らす。

さて、そろそろ眠ろう。あとは吉報を待つだけだ。

さくらは、やれるだけのことはやった。だから今度こそ、今度こそ、報われるべきだ。

――

休日。
オーディション当日になろうとも、太郎の日課は「あまり」変わらない。
緊張感を腹に抱えたままで朝を迎え、味のしない朝飯を口にし、他に手がつかないからと部屋でゴロ寝して――やっぱり落ち着かないので、サガを散歩することにした。
日差しが実に眩しかったが、気分はこれっぽっちも晴れない。原因はもちろんオーディションで、「さくらは合格するだろうか、するに決まってる、でも厳しい世界らしいし」を、頭の中でずっとリピートし続けていた。
腕時計を見る。まだ、午前九時半。
こんな時間では、合否なんて出てもいないだろう。今日という日に限って、やけに時の流れが遅い気がする。
もうちょっと、遠くに歩いてみるか。
そう思って、歩き慣れた道から少し外れ始める。目印になるビルは目に見えているから、多少迷ったところで問題はない。
そうして、初めて見る喫茶店を一瞥する。知らなかったラーメン屋を横切る。公民館らしい施設を横目で眺める。そうしていつの間にやら、物静かな住宅地に足を踏み入れていた。
数分ほど歩いて、思う。
サガとは、こんなにも静かだったかなと。
朝っぱらという時間を抜きにしても、いくらなんでも人と会わなさすぎだろうと思う。車だって、僅か数車程度しかすれ違わなかった。
人が少ないのかなあと、太郎は何となく考える。散歩をしている時だって、そんなにも人とは会わないっけ。
そう思うと、何だか寂しいなと思う。これでも、郷土愛は割と強いほうだから。
そうして表情を一つも変えないまま、住宅地を無感動に歩んでいく。ポケットに潜ませておいたイカゲソを口にしながら。
さて、
そろそろ戻ろうかなと、そう思った矢先、

後ろから、サイレンの音が聞こえてきた。
とっさに振り返る。太郎の後ろから、ランプを赤く照らした救急車があっという間に太郎を追い抜いていく。
どこかで事故でも起こったのかなと、太郎は他人事のように思う。そして救急車は曲がり角を曲がって――すぐに停車した。
うん？
当然気になり始めた太郎は、早歩きで現場にまで駆け寄ってみる。本当に何気なく、確認したらすぐにでも引き返そうと、そんな意気込みで救急車へ近づいていって、
「さくら！　さくらぁ！　大丈夫か！　なあ！」
太郎は走っていた、考えるよりも先に。
思う。聞き間違いであってくれ。思う。同姓同名であってくれ。
足首を捻ってまで、曲がり角を曲がった。野次馬らしい人の集まりが目に入ったが、それを容赦なくかき分けていく。非難の声を次々と浴びるが、どうでもいい。
そして太郎は、ストレッチャーの上で血だらけになっている、その人を見た。
太郎から、一切の言葉が失われる。
その人の瞳は、何も映し出してはいなかった。
現場の近くで停車していた軽トラを目にして、ふしぎと冷静に「ああ」と思った。
なんとなく、０３―５６というナンバーを覚えた。
ドライバーらしい男が、土下座をしてまで何度も何度も謝っていた。
父親らしい男性が、さくらの傍らで幾度となく名前を呼びかけていた。
それを目にしようが、耳にしようが、限りなく似た誰かが被害に遭ったのだと思い込みたかった。
けれど太郎は、何の不幸かそれを見つけてしまったのだ。
「源」と書かれた、表札を。
現実をねじこまれた瞬間、僕は現場からふらふらと離れていって、

吐いた。

あれから、数日が経った。
今でも、これまでのことを鮮明に思い出せる。
さくらの惨状を目にした時の、真っ白な呆然を。家に帰った後の、真っ黒な脱力感を。前の席に誰も座っていなかった時の、灰色の実感を。死化粧に染められたさくらを見た時の、真っ白な空虚感を。
生きてきて十七年になるが、これほど感情を吐き出したことは初めてだと思う。二度と、こんなことはないだろう。
だからか、今の自分は「前」と同じようになってしまっている。ただ息をして、ただ歩いて、ただ食うだけの乾太郎に。
学校にいる時は、それこそ淡々の一言に尽きる。表情を一つも変えず、受け身のまま授業を受けるだけ。けれども、挨拶だけは交わしていた。
家にいる時は、大抵は寝てばかりだ。やる気なんてこれっぽっちも起きない。
家族も察してくれているのだろう。ロクに会話もしない自分に対して、あえて不干渉の選択をとってくれている。いまの太郎からすれば、それはほんとうにありがたかった。

休日の夜。寝てばかりの一日を過ごしたせいか、何十分も目を閉じてもぜんぜん眠れる気がしない。頭だって冴えきってしまっている。
ずっと同じ体勢でい続けたせいか、体もずいぶんと熱い。「くそ」と吐き捨てながら、太郎はベッドから起き上がり、
窓を、何となく見た。
嘘みたいに丸い月が、太郎の目を静かに射抜く。
いい景色だ、と思った。
だから、外に出てみようかなと思った。
お行儀の良い太郎からしてみれば、実に大胆すぎる選択だ。けれど

も眠れやしないし、源さくらはもういない。だから、いいのだ。

□

夜十一時のサガは、本当にほんとうに静かだった。
そんなサガの中で、太郎は背筋を曲げながら、あてもなくどこかへさまよっている。
人はもちろん、車の一台もすれ違ったりはしない。すっかり寝静まっているらしい一軒家を横切り、シャッターが閉じられた店を通り抜け、交通量ゼロの横断歩道を渡っては、何となく左右を見渡してみる。
――ほんとう、静かな場所だ。
今の自分には、まさにお似合いの世界だと思う。喧騒の一つでもあったら、たぶん苛立ってしまっていただろうから。
ため息をつく。
いつか、乗り越えなければならない現実ではあるのだろう。
けれども源さくらの存在は、あまりにも大きかった。これ以上の恋なんて、できそうにもないくらいに。
今だからこそ、さくらのことはよく思い出せる。ほんとう、報われない子だった――笑顔が、あまりにも眩しい女の子だった。
さくらは、立派な人だった。だからこそ、つくづくつくづく思う。
――どうしてさくらが死んで、僕なんかが生き残って、
「――おい」
心臓ごと震えた。
明らかに自分に向けての、よく通る声だった。
無感情だったはずの太郎に、恐怖が芽生え出す。そしてそのまま、声のした方へと、ゆっくり振り向いていって、
「何してんだ。そんな死んだ目ぇして」
中年の男と、目が合った。
その男は両腕を組んでいて、見るからに面倒臭そうな態度をとっていて、けれども太郎のことを明らかに見据えている。

「あ、えと、その」
「こんな時間にふらっふら歩いて、何か嫌なことでもあったのか？うん？」
簡単に見透かされるほど、いまの自分はひどいのか。
たぶん、そうなのだろう。
「ま、まあ、はい」
「そうか。……良かったら、話だけでも聞いてやるぞ」
「いえ、いいですよ、そんな」
「構わねえって」
男は、やれやれと両肩を上下させて、
「いまのお前さん、相当堪えてるみたいだしな」
まるで、今の今までを見てきたかのような言動。
太郎は、沈黙で肯定することしかできない。
「ほら、入りな」
店長が、親指で後ろの店を指し示す。
看板には、「ＢＡＲ　Ｎｅｗ　Ｊｏｆｕｋｕ」と書いてあった。
「……失礼、します」
「いいってことよ」
太郎は、なぜだか思う。この人になら、すべてを話せると。

□

ＢＡＲなんて、生まれて初めて入った。
暖色に包まれた店内は、明らかに子供お断りの雰囲気を醸し出している。カウンターの向こう側に置かれた棚には、酒という酒が並べられてあるし。
「座りな」
「で、でも、僕は未成年ですよ」
「酒は出さねえよ」
そういう問題なんだろうかと、太郎は思う。
もし客が入ってきたら、もしかしたら通報されてしまうかも。そう

なったら、親に迷惑をかけてしまう。
太郎は落ち着き無く、出入り口の方を注視した。
「心配すんな、客は滅多にこねえよ」
「は、はあ？」
「お前さんのような客は、あんまりな」
その言葉に、太郎は首をかしげる。
「ほら、水だ。……さて、何があったか話してみな」
「……暗い話ですよ」
「俺はバーのマスターだ。グチを聞くことは慣れているさ」
しみったれた自分の顔に対して、マスターは始終軽快そうな表情を露にしている。
不快感、は覚えなかった。
今の自分にとっては、こうした雰囲気が一番必要なのかもしれない。
「じゃあ、言います」
僕には、源さくらという友人がいました。その子はとても頑張り屋さんで、すごく眩しくて、自分なんかとは比べ物にならない人だったんです。
僕は見ての通り、こんなにも暗い男です。ですがさくらさんは、いつだって僕に対して、挨拶を交わしてくれました。
――ほう
さくらさんはとても優しくて、それでいて才能がありました。けれどもさくらさんは、けっこう不運な人で……いざ見せ場がやってきても、不意にトラブルがやってきては、全てがおじゃんになってしまうんです。
それが、本当に辛かった。あんなにも優しい人が、どうしてこうも報われないんだと、つくづく思っていました。
――なるほどな
それでもさくらさんは、決して絶望したりせず、自分の力で立ち上がっていきました。
……彼女がアイドルになるって宣言した時、彼女はとても輝いてい

た、今度こそ報われて欲しいと思った。だから僕は、彼女のことを心の底から応援し続けました。
――ほほう
それなのに、それなのに、さくらさんはまた報われなかった。それも、死というどうしようもない結果を押し付けられてッ！
どうしてあんなにも優しい人が、死ななければならなかったんですか。どうせなら、自分が、
「おい」
有無を言わさぬ呼びかけを受け、太郎の言葉がぶっつり切れる。
「す、すみません……」
「そんなこと、滅多に言うもんじゃねえよ。気持ちはわかるけどな」
マスターが、酒を一杯煽る。
「しかしまあ、あれだな」
そしてマスターが、深々と苦笑いして、
「お前さん。その子のこと、よっぽど好きだったんだな」
「――はい」
「どれほどだ」
「これ以上の人は、いないと思えるくらいには」
「そうか」
水を飲み干す。気づけば、こんなにも長居していた。
「なあ」
「はい」
そしてマスターは、特に雰囲気を変えないまま、
「また会いたいか、その子に」
「はい」
迷いなく、答えられたと思う。
「そうか」
マスターが、ウイスキーを飲み干して、
「もしも、だが」
「はい」
マスターは何でもないような様子で、さも日常だとばかりの態度

で、
「源さんを蘇らせる方法があるのなら、お前はそれをやっちまえるのか？」
「――はい」
迷いなく、答えられた。
好きだから、そういう私欲も間違いなくある。
けれどもそれ以上に――彼女には、今度こそ幸せになって欲しかった。
「そうか」
最初は、単なる質問だと思っていた。
「じゃあ、会わせてやるよ」
けれども、マスターの表情はこれっぽっちも変わってなどいない。
――察する。この人は、本気で物事を口にしているのだ。
「ただし、時間はものすごくかかるがな」
時間がかかる。その言い方に、とんでもないリアリティが生じた。
動揺しきっていた太郎は、なかなか言葉を紡げない。それをマスターも分かっているのか、ただただ太郎の反応を待ち続けている。
死者の蘇生。
それは、決して抗えない万物の夢。
自分も決して例外じゃない。棺の中に眠るさくらを目にした時、目を覚まして欲しいと何度も何度も願った。また笑ってほしいと、幾度も幾度も祈った。
さくらが目を覚ますのなら、自分の命と引き換えになってしまっても良い。本気でそう考えていた、それを間違いだとも思わなかった。
それほどまでに、源さくらという人は大きかったから。
――だから、
「本当、なんですね」
「ああ」
「からかい、ではないんですね？」
「ああ」
「……どう、蘇らせるんですか」

マスターが、ふっと笑う。

「ゾンビとして、だな」

聞き覚えのある単語を耳にして、うわ言のように「ゾンビ？」とつぶやく。

「そう、ゾンビだ。……これには、二つの蘇らせ方がある」

「それは？」

マスターが、人差し指を立てる。

「ロボットとして使役する為に、イメージ通りのゾンビとして起き上がらせるか」

イメージ通り。つまりは、今の自分のようなやつか。

――そしてマスターは、今度は中指を立て、

「生きている人間と同じように、自我を保たせて蘇らせるか」

太郎の思考が、強張った。

「そんなことが、本当に、できるんですか？」

「出来る」

「おお……」

「ただし、」

マスターが、空になったコップを置いて、

「一度これをやっちまったら、二度とお天道さまに顔向けはできねえぞ」

マスターの表情から、初めて色が消えた。

それだけで、乾太郎は全てを察する。

前に進むためなら、魂すら弄ぶ外道に堕ちるのか。

悲しみを背負いながら、常人として前へ歩み続けるのか。

そう、問われている。

太郎はうつむき、人差し指で己が額を支えた。

マスターの言う通りだ。親が執り行うならまだしも、こんな赤の他人が、手前勝手な欲望で誰かの魂を呼び戻そうとしているのだ。それは間違いなく、悪の所業以外にほかならない。

――さくらの死を、見届けてきた人たちのことを思い起こす。
死とは、本人だけにもたらされるものではない。さくらの親は嘆き、さくらの友人は嘘だと叫び、さくらを轢いた男は罪を認め、さくらに恋した自分は抜け殻同然と化した。命は一つだと理解しているからこそ、誰もがさくらの死を認め、そっと受け入れようとしている。
それは絶対に、簡単なことではない。
だからこそ、なかったことになどしてはいけない。
けれども太郎は、マスターの案に乗ろうと――違う。本心本音の願いを、欲望のままに叶えようとしている。
否定はすまい。だって自分は、さくらと自分の命を比べてしまうような男なのだ。さくらの死を、まるで全然受け入れられていないじゃないか。
冷静になろう、常人らしく考えよう。さくらの死を、ありのままに受け入れて、
――ありがとう、乾君
「……やります」
ごめん、さくらさん。
「本気か」
「はい」
「理由は」
「――彼女を、アイドルとして輝かせたいからです」
君のおかげで、僕は、生きていて良かったと思えたんだ。
「……俺はてっきり、源さんって人と結ばれたいものかと思っていたぜ」
「外道と源さんとでは、まるで釣り合わないでしょう?」
「そうか、それもそうだな。――てことは、あれか、自我を保たせたままで蘇らせたいんだな?」
「はい」
「わかった。……じゃあ、これだけは言っておくぞ」
何だ。
太郎は、ぐっと奥歯を噛みしめる。

「絶対、見捨てるなよ」
その質問に対しての答えなんて、たった一つしかない。
「当然です。蘇ってしまった命の責任と、ずっと向き合います」
「そうか」
自分は、源さくらのことが好きだ。
だからこそ、アイドルとして輝いて欲しかった。絶対的な幸せを、その手で掴み取ってもらいたかった。
さくらが笑顔になってくれれば、恋なんて実らなくてもいい。むしろ、こんな外道の事なんて忘れてもらって構わない。
僕は世界一、死と向き合えない男だ。
だから、こんな手前勝手を願えてしまえるのだろう。
それでいい。僕の世界は、さくらとサガで出来ているようなものなのだから。
「……で、だ」
「はい」
「アイドルってのは、そう簡単になれるモンじゃないんだろ？」
「ですね」
「――のワリには、全然堪えてねえみたいだな」
「言ったでしょう。俺は必ず、さくらをアイドルにしてみせるって」
「なるほどな」
マスターが、どこか楽しそうにくつくつと笑う。
「よしよし、わかったわかった。やっぱり、俺の目に狂いはなかったみてえだな」
まるで、こうなることが分かっていたかのような言い回しだった。
けれども、不思議とはまるで思わない。相手は、魂すらも操れてしまうような男なのだから。
「ほれ」
何かの鍵が、カウンターの上にことりと置かれる。
「これは？」
「昔住んでいた、隠れ家の鍵さ。町はずれに館がある、知らねえか？」
「館、」

散歩がてらに、それらしいものを見た気がする。あの時は、なんとも薄気味悪い場所だなあと何気なく思っていた。
「そこには、『術』を使うのに必要なモノも揃ってある。どうだ、日陰者にはもってこいな場所だろう？」
「確かに」
太郎は、鍵に手を伸ばそうとして、
「なあ」
「なんです」
「ここまで言っておいてなんだが、本当に悔いはないんだな？」
鍵を、握りしめる。
「そうか。じゃあ、もう何も言わねえよ」
呆れたのかどうなのか、マスターは苦笑いをこぼした。
「ま、せいぜい頑張れ。アイドルのことはよく知らねえが、なるだけ手伝ってやるよ」
「――あの」
マスターが、「ん」と唸る。
太郎は、未だに笑みを絶やさないマスターの目を見て、
「どうして、そこまでしてくれるんですか？」
それほどまで、自分は「見込み」のある男なのだろうか。
そんな疑問に対して、マスターは「なあに」とひと置きして、
「なんか、昔の俺と似ていたからさ」
「――へえ」
その返答に対して、太郎は、なんだか自然と笑ってしまっていた。

四話

一年目　Ａ月Ｚ日
今日から日記をつけることにした。それもこれも、これから始まるであろう長い戦いに備えてだ。
こうして足跡を残していけば、改善すべき点も容易に見直せるし、過去の成功体験を読んで自分を励ますこともできる。
さくらさんをアイドルにするからには、自分もそれ相応のスキルを身に着けなければならない。それらを習得することは、決して楽な道ではないだろう。
それでも僕はやる。僕を生き返らせてくれたのは、間違いなくさくらさんなのだから。

一年目　Ａ月Ｂ日
改めて、マスターに会いに行った。まずは、今後のことについて話し合わなければならない。
マスター曰く、「死体なら俺に任せろ、それ以上は聞くな」とのことだ。今になって、自分の行おうとしていることが恐ろしく感じるが――
悔いなんてない。僕はさくらさんと出会えなければ、死んでいるも同然だったからだ。

屋敷に関してだが、住心地は良さそうだ。若干じめじめしているが、外道には相応しい場所だろう。
それよりも特記すべきは、地下牢でさまよっていた女ゾンビについてだ。マスター曰く「あいつは戦乱の中で生まれたんだが、尋常じゃない
生命力で時代を駆け巡ったのさ。まあいろいろあって、結局は死んじまったんだが」とのこと。

生命力溢れる彼女を媒体にすれば、他人を蘇らせることが可能なのだという。
鉄格子越しに彼女のことを眺めてみたが、自我らしいものはあまり感じられない。積極的に襲ってくる気配もないのだけれど。
それに関しては、「時代が古すぎて、さすがに完全蘇生には至らなかった」とのことだ。
「じゃあ、彼女を蘇らせたのも？」
「まあな」
「なぜ？」
「……恩人を、永遠のものにしたくてな」
そして次に、さくらさんをどういったアイドルにしたいか、それをマスターに話した。
生前のさくらさんは、アイアンフリルのような、誰かを笑顔に出来るようなアイドルになりたいと言っていた。
アイアンフリルは、複数の女の子メンバーで構成されたアイドルグループだ。扱っている音楽ジャンルは多岐に渡り、そのどれもがポジティブシンキングな曲調になっている。
まさに、さくらさんにピッタリだ。
……問題は、どこの事務所を通してさくらさんをアイドルにするか、ということなのだが――僕が新たに、事務所を立てることにした。
そうだ。僕は将来、立派なアイドルプロデューサーになってみせると誓った。
無謀かもしれないが、さくらさんをアイドルに仕立て上げるにはこれしかない。何せさくらさんは、死んでしまったのだから。
……誰が、死者をアイドルにしたいと考えるだろう。そもそも、アイドルになる為の手続きすら不可能だ。
そう、普通なら。
でも僕は、普通じゃない。
だから、ゾンビアイドルグループを結成しようと考えた。
話を戻す。
アイアンフリルとは、複数人のメンバーで構成されているアイドル

グループだ。だから、さくらさんをソロで動かすつもりはない。
あと五人か六人、それぐらいのメンバーを追加することになるだろう。もちろん、さくらと同じ死者を。
――僕はひどい男だ。本当に自分勝手な動機で、たくさんの命を弄ぶことになるのだから。
だが、もう迷わない。甦った命とは、真正面から向き合う。絶対だ。
メンバーの選考に関してだが、ぜひ「実績」のあるメンバーと組ませたい。それはアイドルだったり、ダンサーだったり、芸能人だったり……あわよくば、一流の人材が望ましい。
未経験者一人、その他メンバーは経験者だなんて、実に都合が良すぎる構成だと思う。しかし蘇生術ならば、それが出来てしまうのだ。
万が一、そうしたとして――意見の相違だとか、喧嘩だとか、そういったものは必ず起こりうるだろう。
だが僕は、絶対に見捨てない。さくらさんのみならず、その他のメンバーも。そうやって接することこそ、ネクロマンシーの義務だ。
ここまでは、「さくらをアイドルに、ひいては他のメンバーだって輝かせる」と書いた。
しかし他に、僕にはやるべき使命がある。
それは、サガという世界を救うこと。
僕は、サガが好きだ。だからこそ、寂しさが目立ってしまっていることもよく解っている。
そこを、「ご当地アイドル」の力で少しでも活性化させられたら。僕は、そう閃いた。
サガは、僕に余裕をもたせてくれた場所だ。飯はうまいし、穏やかな人が多いし、何よりさくらさんと巡り合わせてくれた。
――僕は、神など信じていない。だから、外法も使う。
けれどサガ人として、サガには申し訳ないと思っている。
だから僕は、さくらさん達を蘇らせる代償として、必ずやサガを救うと決めたのだ。
サガという世界がより良くなれば、さくらさんは生前よりも楽しく生きていけるだろう。

話し終えた時、マスターからはこう言われた。「壮大な計画だが、名前とかはねえのか？」と。
少し考えて、ゾンビランドサガプロジェクト、ということになった。

一年目　A月V日
僕は変わらなければいけない。さくらをプロデュースするからには、様々なことを学ばなければならない
。
まずは性格、これは絶対に治さなければならない。こんなにも口下手で、こんなにも無表情では、交渉すらもままならない。
次に、時流を読む力を養わなければならない。求められる音楽、衣装、振り付けなど、時代とミスマッチしていては売れるものも売れない。
次に、音楽に関しての知識。これに関しては、音大に入って猛勉強をすると決めた。学ぶべきは作詞作曲、非常にハードルが高いが――やる、必ずやる。僕はさくらさんをアイドルにしたいんだ。
気の早い話になるが――たぶん、大学を卒業した時こそ、親とは永遠に別れることになるだろう。
僕のような外道に、乾家を名乗る資格などないからだ。
父さんと母さんにだけは、こんなことに巻き込みたくはなかった。
あとは車の免許を取ることぐらいか。バイトをして、資金も蓄えておかなければ。
――これらをマスターに伝えたところ、
「……ゾンビ丸出しのままで、人様の前に出せると思っているのか？」
僕の口から、「あ」が漏れた。よく覚えている。
「まあ、策はあるぞ。あれだあれ、化粧、あれでどうにかなるんじゃねえのか？」
それは、葬式においても執り行われるものだ。
それをより、本格的にしたものとなると――特殊メイクの域に入るだろう。
性格の矯正、世間への関心、作詞作曲、特殊メイク、そして「術」へ

の理解――これは、思った以上に長くなりそうだ。
だが、僕はやる。

一年目　B月Z日
音大に入りたい、これを両親へ告げるのにはかなりの時間がかかった。
当然だ。それを口にしてしまえば、自分は二度と、両親とは顔向けできなくなるのだから。
もしも両親が、放任主義者だったらと思う。冷酷だったら、と思う。
けれど両親は、こんな僕のことを息子としてずっと見守ってくれた。無口で暗かった僕に対して、どこまでも優しく接してくれた。
予想はしていたのだ。何の突拍子もなく「音大へ入りたい」と言っても、受け入れてくれるのではないかと。
結果は、予想通りだった。
父は「そうか」と笑い、母は「素敵な目標じゃない」と喜んでくれた。お金も、出してくれるらしい。
このページには、栞を挟んでおく。
このページをめくった後は、僕はもう迷わない。いや、迷うことすら許されないだろう。

一年目　G月Z日
音大へ向けての勉強が、今日も続く。
音楽に関してはド素人で、前までは興味もなかったからこそ、とてつもなく難しい。
けれど僕は、やる。さくらさんをアイドルにするために。

一年目　G月Y日
さくらの死から、数日が過ぎた。
最初は陰りのあったクラスも、徐々に笑みが漏れ始めている。現実を受け止められているのだろう。
対して僕は、今日もさくらさんの為に生き続けている。

悔いなんてない。

一年目　Ｊ月Ｚ日

勉強も大切だが、流行りを追うのも重要だ。

だから僕は、勉強を行いながらもテレビを見る。主に、学校で話題になっている番組をだ。

とくに視聴している番組は、「恋愛物語」という大人気恋愛ドラマだ。曰く「主題歌がいい」とか、曰く「脚本がいい」とか、とにかくポジティブな意見が目立つのだが、その中でも特に評価されているのは、

「あのドラマ見た？『恋愛物語』っていうの。あの星川リリィって子、超可愛いよね！」

その意見には、納得せざるを得ない。星川リリィという子役は、とにかくこうすごい。

感情表現とか、表情の出し方とか、とにもかくにもすっごいのだ。これで九歳だというのだから驚きだ。

なるほど、これは確かに話題になる。

一年目　Ｋ月Ｚ日

アイアンフリルのライブが、このサガで開催されるらしい。

見逃せなかった。アイアンフリルのことは常日頃からチェックしているが、やはり生の体感以上に有益な情報はない。

どうして彼女たちがトップとして君臨できているのか、それを見極めよう。

そして何より、どうしてさくらさんが彼女たちに――水野愛のファンになったのか、それを知りたい。

ライブが当たるかどうかは分からなかったが、やるしかない。自分の幸運を信じよう。

一年目　Ｌ月Ｚ日

あたった。

ぼくすごい。

一年目　G月L日
遂に明日はライブだ。何だかどきどきする。
勉強もいいが、こういうのも良いものだ。
――やっぱりさくらさんは、人を変える力がある。

一年目　G月S日
信じられないことが起こった。
水野愛が、落雷に打たれた。
――数分後、
一年目　G月S日
ようやく目を覚ましてきた。
なるだけ、詳細を書く。
ライブ当日ということで、僕は会場へ出向いてみたのだが――若い男性はもちろん、年配の人、少なくない女子、更には老人まで、年齢を問わずにアイアンフリルを今か今かと待ち続けていたのだ。
あまりの熱気に、文字通りくらくらしてしまった。
そして実感した。アイアンフリルは、トップアイドルだと。
そして数分後に、アイアンフリルのライブが始まった。
花火のように弾け飛ぶ歓声、それに応え続けるアイアンフリルの歌声、枯れることを知らないダンス、遠目でもわかる逞しい表情達――いまでも思い出せる。ライブ中だというのに、「またライブがあったら行ってみたい」とすら考えていた。
そしてライブ中に、雨が降ってきた。
けれどもアイアンフリルは、決して舞うことをやめはしない。むしろ、水を浴びて体が躍りだした気配もあった。
そんなアイアンフリルの姿を見て、雨に打たれるというシチュエーションに舞い上がって、観客達も盛りに盛り上がっていった。僕もつい、声を上げてしまったものだ。
数々のナンバーが唄われていって、音と声が絶えずに響いていくな

か――屈指の人気曲が、会場全体に轟いた。
イントロと同時に大爆発を起こす観客、さくらさんのことを思い出す僕、雨に濡れながらも己を表現していくアイアンフリル。会場と、人と一体化したのなんて初めてだったが、あまりにも心地よかった。
これがライブなのだと、この時の僕は思い知ったものだ。
鳴り止まぬ歓声をよそに、最後の曲が終わりを迎えていく。あと少しで、この世界が終わってしまう。
ライブの高揚に飲まれたままで、僕は水野愛の行く末を見届けていって、
水野愛が、会場を真っ直ぐに駆ける。そして、天を貫かんと腕を突き出し、雨を払わんと顔を太陽のように輝かせ――
水野愛は、落雷を受けた。
こうして文字にしてみると、あまりにも荒唐無稽だと思う。
けれど、あの時の光は、沈黙は、匂いは、今でもはっきり思い出せる。
会場内は、それはもうひどいことになった。悲鳴が乱立し、逃げ出そうとする者も現れ、嘔吐する人もいた。
そんな中で、僕は比較的、冷静に突っ立っていられていたと思う。
そして水野愛には申し訳ないが、僕はこう考えてしまっていたのだ。
さくらさんが、この場面を目にしなくて良かった、と。

一年目　U月Z日
水野愛が死んだ。
そのニュースをテレビで知った時、僕は、とてもおぞましいことを真っ先に考えてしまった。
なるほど。僕には、こういう「素質」があったらしい。

二年目　G月Z日
高校三年生になった今でも、やっていることはほぼ変わらない。
音大へ向けて勉強を重ね、テレビを見て流行りを把握し、週末はマ

スターから「術」を学ぶ。本当にこればかりだ。
もちろん、自分を磨くことは大切だ。諦めるつもりもない。
けれどやっぱり、自分にとって一番大切な習慣とは、挨拶をかかさないことだ。
何かが動けば、おのずと周囲に影響が及ぶ。ここ最近は、周囲から善く評価されるようになった。
良い傾向だ。魅力がなくては、プロデューサーにはなれない。

二年目　Y月Z日
今日、クラスメートから「おはよ、乾」と声をかけられた。
対して俺は、「おはよう」と笑って返す。そしてそのまま、昨日見たドラマについてあれこれ話し合うのだ。
僕に友達が出来たのも、はきはきとした挨拶をし続けたからだ。
だから、僕は認められた。
さくらさんの言うことは、まちがいなく正しかった。

二年目　X月Z日
テレビを点けてみると、必ずといってもいいほど星川リリィがよく映し出されている。
やはりというか、リリィには人を魅せる何かがあるのだ。オーラというか、カリスマのようなものなのかもしれない。
天才子役と謳われているが、異論はない。あと1チャンネルで全チャンネルゴールデン出場達成と聞くし、本当にすごい女の子なのだろう。

二年目　G月Z日
今日は術の練習だ。
これは、勉強をするよりも遥かに難しい。覚えることがあまりにも多すぎる。
けれど、それは当たり前のことなのかもしれない。何せ蘇生術だ、これが簡単であって良いはずなどない。

おそらく、甘く見ても三年以上はかかるだろう。
だが、諦めるつもりはない。

二年目　K月Z日
さくらが亡くなって、一年以上が経過した。
皆、さくらのことを話題にしなくなった。誰もが今のことを、そしてこれからのことを話し合っている。
対して自分は、あの日から死んだままだ。
そう、思いたいのかもしれない。

二年目　U月Z日
アイアンフリルのライブが、今年も開催された。
最初は中止も考えられたのだが、「水野愛のために」というアイアンフリルの意向によって、通常通りにライブを行うことになったのだとか。
もちろん、雨天中止という条件付きで。
もちろん、今年のライブにも参戦するつもりだ。さくらさんが憧れた彼女たちの姿は、ぜひとも見届けたい。
ただそのためには、高倍率のチケットを当てなければいけないわけで――あたった。おれすごい。

二年目　R月Z日
そんなわけで、ライブに行ってきた。
会場は晴天そのもので、雨雲の気配なんてこれっぽーちも見えやしない。これで、余計な心配はせずに済む。
アイアンフリルがステージに立つ前に、会場内では静かに声が漏れあっていた。
盛り上がりとは違う、どこか遠慮めいた雰囲気に、自分は「だよな」と察したものだ。
老若男女問わず、誰も彼もが水野愛について語り合っていた。ある者はため息をつき、ある者は一昔のように思い起こし、ある者は涙を

流している。
無理もない。あの事件はあまりにも唐突で、ひどいくらい衝撃的だった。
そうして、アイアンフリルがステージ上で、横一列に並ぶ。今は新メンバーが加入されていて、活動する分には何の問題もない。
――そして、リーダーらしいメンバーがマイクを握りしめた。
「今日は来てくれて、みんなありがとう。――水野愛のことは残念だったけれど、彼女の分まで、私達は輝きます」
いつまでも、死を引きずるわけにはいかない。
人間として、あまりにも正しい選択だった。
「けれど、でも、これだけは言わせてください」
それでも、いなくなった人のことを想い続けたっていい。
「水野愛は、不動のセンターですッ！」
リーダーの隣には、人一人分の空白が空いていた。
そこは、ステージの中央。
会場内の観客達は、その言葉で全てを受け止めることにしたのだろう。誰もが声を上げ、誰もが拍手をし、誰もが水野愛の名前を叫んでいた。
みんなは、死と乗り越えようとしている。
対して僕は、死と向き合ったまま。
それは、よくないことなのだろう。それはわかっている。
けれど、やめられそうにはない。
アイアンフリルのライブは、それはもう盛大に盛り上がった。
曲が始まるたびに、メンバーたちはステージ上で踊りに躍る。そんな生き様を魅せられて、観客達も活き活きとコールし続ける。
僕だって、そりゃあ合いの手は打った。だって相手はあのアイアンフリルだから、さくらさんが憧れたアイドルグループだから。
帰った後は、泥のように眠った。何やかんやで、楽しかった。

二年目　E月Z日
冬が過ぎて、音大の試験日が間近に迫ってきている。

勉強のかいあって、大体のことは覚えた。鼻歌混じりで、ちょっとした音楽を作ることも時折。我ながら、上手くいっていると思う。
そして周囲からは、よくよく応援されるようになった。それもこれも、笑顔で挨拶をするようになったからだろう。
絶対にそうだ。

三年目　T月Z日
試験日前日。僕はいつもよりも早めに、眠ることにした。
やるべきことはやった。

三年目　I月Z日
合格した。
友人達からは背中を叩かれ、親は数年ぶりに泣いて、僕はただただ笑っていたと思う。
涙は、流せなかった。たぶん、尽きてしまったのだろう。

三年目　Y月Z日
無事に高校を卒業して、音大のある都会へと引っ越した。今日から寮生活になる。
あまりサガから離れたくはなかったのだが、仕方がない。これもゾンビランドサガプロジェクトのためだ。
とはいえども、サガの料理が恋しくなることもあるだろう。だから僕は、ソウルフードであるサガ産イカゲソを大量注文しておいた。
――それにしても、だ。
初めての都会は、サガよりもあまりに賑やかで、どこにでも人がいた。慣れるまで、少しばかりの時間がかかるだろう。
この期に、今日から本格的に特殊メイクの勉強をしてみようと思う。
少し情報を集めてみたが――やっぱり、メイクも奥が深い。そう簡単に、マスターなど出来るはずがないだろう。
だが、今はネット全盛期だ。少し検索してみれば、プロの手による

メイクメイキング動画が簡単に見つかってくれる。良い時代になったものだ。

三年目　Ｕ月Ｚ日

音大に入学して、数日ほどが経過した。

ここでひとまず、軽く出来事をまとめてみようと思う。

まず音大についてだが、やはり専門知識を得られるのは非常に大きい。おかげで、ノートはもう真っ黒だ。

いくつかの歌詞、曲も作ってみたが、講師はそれらを冷静に評価してくれる。やはりまだまだだが、講師からは「乾さんは、とても生真面目ですね。それでいて曲への執着も強い。素晴らしい」と言われた。この姿勢は、絶対に崩さないつもりだ。

次に、大学で友人が出来た。

プロデューサーになろうとしている身だからこそ、この出来事はとても嬉しい。他人と接することが出来ないようでは、プロデューサー業はままならないからだ。

時には音楽について意見交換して、時にはテレビの話をして、時にはハメを外す。自分はようやく、普通の男になれたのだと思う。

いつかは消えてなくなる日々だけれど、今だけは、この瞬間をじっくり噛み締めよう。他人と感情を分かち合えないようでは、プロデューサーになる資格はない。

こんなふうになれたのも、すべては、笑顔で挨拶を交わしてきたからこそだ。

次に、特殊メイクについて。

ここ最近は、表面を荒くしたマネキンにメイクを施してはＳＮＳにアップし、「どうですか」と評価を促している。

やはりというか、アラが見え見えなのだろう。「これがぁ？」とか「何それ」とか、辛口な評価が届くことが多い。そして、必ず少なからず「このサイトが参考になると思います」とＵＲＬを貼ってくれる者が現れたり、「これからに期待」と言ってくれる人もいた。

そう、「必ず」だ。

世の中は、そんなに悪くはない。
次に、最近始めたバイトに関して。
何をするにしろ、とにもかくにも金は必要だ。なので今後の為に、自分は接客に関わるバイトを始めた。
接客業を選んだ理由は、とても口下手な自分と決別する為だ。
知り合い相手ならともかく、赤の他人となると、つい口ごもってしまう。こうしたつまづきは、交渉するにおいて非常に不利なものであるはずだ。
どんな相手だろうと、堂々と接し、口を開く。自分にとっては、これが本当に難しい。
それもこれも、今の今まで他人に無関心であったせいだ。ツケがここにきてやってくるとは、悔やみきれない。
けれど、やるしかないのだ。
僕はプロデューサーになって、さくらさんをアイドルに仕立て上げたい。彼女の笑顔を、もう一度見たい。今度こそ、彼女を幸せにしたい。
そのためなら、どんな道だって歩んでやる。
次は、術について。
これに関しては、月末にサガへ帰ってはマスターの元で練習を繰り返している。
習得するのには、まだまだ時間がかかりそうだ。けれどマスターは、いつまでも自分のことを待っていてくれている。
思うと、あの人はいくつなのだろう。たぶん、答えてはくれないだろうけれど。

三年目　Ｉ月Ｚ日
高校時代と比べて、誰かと話す機会がとても多くなった。その為か、口も表情もよく動いてくれている気がする。
よく話す友人はだいたい五人ほど、特に元ゆり（はじめゆり）という女性とは、頻繁に会話を交わし合う仲だ。
ゆりとの馴れ初めは、「アイアンフリルが好き」という何気ない一言

から。それで意気投合して、今となっては音大仲間として付き合えている。
都会っ子らしく、ピアスやマニキュアといったお洒落を違和感なく着こなせている。今風の音楽にも詳しいようで、彼女の知識には何度も助けられた。
そのたびに彼女は、「いいってことよー」と笑ってくれるのだ。

三年目　Ｐ月Ｚ日
あの星川リリイが、遂に全チャンネルゴールデン出場を果たした。
いつかやると思っていたが、ずっと先のことだと思っていた。いやはや、彼女は伝説だ。
これから先も、リリイはテレビで活躍し続けるのだろう。まだ幼い女の子だというのに、よく体力があるなあと感心してしまう。

三年目　Ｒ月Ｚ日
今日は早めに帰ろうと思ったのだが、友人からの誘いですっかりこんな時間に。
けれど、「まあいいか」と思っている。人付き合いは、プロデューサーの基本だ。
だいたいはＣＤ屋に寄って、適当なＣＤを買ってはぶらつくことが多い。今日はゆりも一緒で、インストゥルメンタルを三枚ほど買っていた。
ゆり曰く、「歌のない音楽って、結構凝ってるよ」とのこと。なるほど、歌に合わせなくても良いからか。
ならばと、僕もインストゥルメンタルを買おうとしたのだが、どれがおすすめか全くわからない。
そこでゆりが、定番のＣＤを差し出してくれた。これも友人付き合いあっての恩恵だ。

三年目　Ｉ月Ｚ日
せっかくの休日ということで、みんなを映画に誘った。いわゆるリ

バイバルものだったのだが、皆はたいへん満足してくれたようだ。
男友達は「よく知ってたな、この映画」と言い、ゆりからは「渋いね、乾君」と感心された。よし。
ここ最近は、面白そうなスポット等があれば、率先して友人たちを誘うことにしている。思い切りの行動力、今すぐやるという決断力もまた、プロデューサーにとってなくてはならないものだからだ。
最初こそ不安だったものの、自信を持って、絶やさずに笑い続けていれば、友人たちは快くついてきてくれた。同じ音大出身ということもあって、趣味も合いやすかったし。
その中でも、ゆりは別段と良い反応を示してくれる。「今日もありがと、乾君」なんて言われれば、プロデューサーとしての自信がついてくる。

三年目　N月L日
今回の作詞は、中々上手くいったと思う。自信を持って提出してみたところ、講師も高く評価してくれた。
それだけでも十分だというのに、講師は「あなたのような生真面目な生徒は、数年ぶりですよ」とまで言ってくれたのだ。
それは確かに、否定はしない。何せ自分の中には、一生消えない未練がぽつんと佇んでいるのだから。
このことを友人たちに報告したところ、盛大に祝われた。ゆりからは、よかったねーと褒められた。

三年目　Y月Z日
今日はアイアンフリルのライブだ。チケットはやっぱり高倍率で、ゆりは「行けたらいいねー」と言っていたが――二人分を獲得して「っしゃー！」と喜んでいた。
そうしてライブが開催されたが、今年は水野愛への冒頭はなし。ステージの中央部も、リーダーで埋まっていた。
それでいいのだと思う。死を振り返らないことは、決して悪ではない。

ただ、水野愛の持ち歌が演奏された時は、水野愛の「これまで」が巨大モニターによく映し出されていた。
誰かが、愛と絶叫した。誰かが、声にならない声を上げた。ゆりは、泣いていた。
僕は、さくらさんのことを思い返していた。
ライブが終わった後は、ゆりとライブについてゆっくり語り合った。「泣いちゃった」と苦笑して、「いいんだよ、それで」と返事をしたっけ。
何でもないこのひと時を、今のうちに噛み締めよう。

三年目　E月S日
年もそろそろ明けようとしている最中、とんでもないニュースが流れてきた。
あの星川リリィが、突如として亡くなったというのだ。原因は精神性ショック、らしい。
活躍は追っていたから、とても残念だと、そう思った。
そして「すぐに」、おぞましいことを閃いてしまった。
もう、癖になってしまっているのかもしれない。

四年目　Y月Z日
せっかくの年明けということで、今は実家でのんびりと過ごさせてもらっている。やっぱり、サガは良いものだ。
その間にも、僕は色々なものを食べさせられている。カロリーを過剰にとらされているのがよく分かるが、まあ、親なりの気遣いなのだろう。
そしてそれが、今はありがたい。
今だけは計画を二の次にして、親に甘えることにする。

四年目　L月Z日
大学が始まって、数日ほどが過ぎた。
作詞作曲の方は、割と上達していっている。

「あなたの素晴らしいところは、様々なジャンルに挑戦する姿勢そのものです。……実のところ、楽しみにしているのですよ。あなたの奏でる音楽を」
講師からの評価も良いみたいだ。
けれど、慢心は禁物だ。自分は、サガに通じる音楽を作らなければならないのだから。
特殊メイクの方だが、こちらはまずまずといったところだ。いきなり始めたようなモノだから、仕方がないといえば仕方がない。

四年目　D月Z日
気づけばもう秋だ。今日も今日とて、プロデューサーになる為の修行は続く。
バイトの方も上手いこと長続きしたお陰で、資金がかなり溜まってきた。汗水垂らしたかいがあった。
どうしたものかねと、帰宅している最中に――軽トラが、僕の横を通り過ぎていった。
瞬間的に、あの日の出来事がふっと湧き上がった。
思わず舌打ちしてしまったが、軽トラの後ろ姿を見て、とあることを閃いたのだ。
運転免許を習得しておけば、後々役に立つのではないのかと。
よし、明日から頑張ろう。

五年目　K月Z日
特殊メイクの方だが、何と最高点を貰った。順調に腕前は上がっているらしいが、個人的にはまだまだこれからだと思う。精進しよう。
音大の方も、順調に事が運んでいっていると思う。
「何を伝えたいのか、それが心地よく理解できます。……この成長速度は、並ならぬものがありますね」
講師から、こう言われた。ゆりからも、「やるじゃん」と肩を叩かれてしまった。
この日々が、ひどく愛おしい。

けれど、未練を残すつもりはない。

五年目　G月Z日

免許を無事に獲得した。その祝いとして、レンタカーを用いて友人たちと意味なく遠出したのだが――草原の上で見た満月は、とても美しかった。

その時、ゆりは笑いながらで、こう言ったんだ。「あんたって、こんなにかっこよかったっけ？」と。

格好良かったら、今頃はさくらさんと結ばれていたはずだ。たぶん。

六年目　O月Z日

今日はゆりと、二人きりで昼食を食べた。

いつもなら五人くらいで昼を過ごすのだが、友人が言うには「用事があってさー」とのことだ。

――嫌な予感がした。

昼食をとった場所は、近場にある普通の定食屋だ。値段はそこそこ、質より量というスタンスは、音大学生達にとっての人気スポットだったりする。

そうしてゆりと向き合いながら、色々な話をした。ここ最近の調子について、サガってどんなところ、寮では何してるの、どうしてあそこまで一生懸命なの――ほとんど、自分が受け答えしていた気がする。

特に笑える回答をした覚えはないというのに、ゆりは、楽しそうな顔で相槌を打っていた。

この時点で、もしかしてと思っていたのだが――ゆりは、こう言ったんだ。

「あんたって、どこまでも音楽を求めてるんだね。かっこいいな、そういうの」

僕は何もしていない。そう思ったが、十分に行動しすぎていた気がする。

動くだけで、他者の心に影響を及ぼしてしまうなんて。これじゃあまるで、さくらさんじゃないか。

六年目　L月Z日

あれから数日が経ったが、今日もゆりから声をかけられた。

暇があれば何処かへ遊びに行こう、そう持ちかけられては「用事があるんだ」と断ってきた。しかしそれでも、ゆりは「ねーねー」と近づいてくるのだ。

ゆりは、決して悪い人じゃない。同じアイアンフリルのファンだし、お互いの音楽を評価しあったりもする。気分が乗らない時は、何やかんやで距離をとってくれたりと、本当に良い人なのだ。

自分は、そんなゆりのことを友人だと思っていた。

ゆりは、こんな自分のことを異性として見ている。

自惚れなんかじゃない。むしろ、自惚れであって欲しかったとすら思う。

自分もいい加減トシだ。だからこそ、彼女の接し方、表情を見ていれば、そうした「意図」はすぐにでも察せてしまう。

――自分も、人を惹き寄せられるような男になれたということか。プロデューサーになれる日も、そう遠くはないのかもしれない。

六年目　J月Z日

いつものように音楽の勉強をして、いつものように昼休みが訪れて、そしていつものようにゆりから昼食に誘われた。

そうして定食屋で、ゆりと世間話をする。アイアンフリルのライブに行ってみると持ちかけられ、とうぜん「うん」と頷く。

そしていつの間にか、賑やかな店内で沈黙していただろうか。ただ食べるだけの時間が過ぎていって、たくあんを口にしている最中に、「私さ、乾君のこと好きなんだ」と言われた。いつもの調子で。

もちろん、断った。彼女はやっぱり、いつもの調子で「そっか、ごめんごめん」と言ってくれた。

その後は特に何事もなく、ゆり達とは音楽について勉強しあった。

――そうだ、それでいい。ゆりは、自分のような外道についていってはいけない。
僕には、好きな人がいる。

六年目　H月Z日
夢を見た。
覚えているうちに、内容を書く。
僕は、高校生になっていた。
「おはよう、乾君！」
桜舞う校門の前で、さくらさんが、僕を待っていてくれていたんだ。
「おはよう、さくらさん。……どう？　アイドル活動の方は」
「もー大変だよ、大変。レッスンばっかりで腰が痛いの」
「だ、大丈夫？」
「大丈夫大丈夫、ちゃんと休んでるから。……そのおかげで、この前のライブは大成功したわけだし」
「ね、あれはほんとうに感動した」
「うん。……ね、乾君」
「うん？」
「――今まで、応援してくれてありがとう」
そして、僕は目を覚ましてしまった。

五話

七年目　F月Z日
大学に入って、もう四年が経過する。ほんとう、あっという間だった。
作詞作曲は上手くいった、術の方も上達してきている。そして特殊メイクの方だが、これが中々上達してくれない。もしかしたら自分は、美術センスが無いのでは？
もちろん、諦めるつもりはない。

七年目　W月Z日
バイト先から、「卒業したら、ここに入らねえか」という誘いを受けた。
そのことは、素直に嬉しいと思った。認められて、恥ずかしがらない男などいない。
だが、丁寧に断らせてもらった。
自分には、やるべきことがある。

七年目　R月Z日
講師から、最高評価をいただけた。その時の自分ときたら、たぶんひどい顔をしてしまったと思う。
ゆりも、「やったね！」とサムズアップしてくれた。友人たちも、すげーすげーと連呼してくれたっけ。
ほんとう、素晴らしい仲間に恵まれたと思う。
――みんなとの付き合いも、あと半年ほど。愛おしい日々を過ごせたことに、心から感謝している。

八年目　J月Z日
やった、やったぞ！
卒業間近、遂に俺は特殊メイクの極意に近づけたぞ！

超嬉しい！　まったくもって管轄外だっただけに、超嬉しい！　僕すごい！

術もお墨付きが入っているし、卒業したら早速行動だ！

行動、か。

覚悟しておかないと。

八年目　V月Z日

マスターから、電話がかかってきた。今後のプランについてだ。

自分の蘇生術は、今のところは完璧なのだという。けれど人間の蘇生はいきなりすぎるから、まずは犬を蘇らせてみろ、とのことだ。

確かにそうだ。いきなり人間相手だと、余計な不安が生じてしまうと思う。

だからといって、犬相手だったら良いのかと言われれば――やる。

それでいいと電話越しで伝えた時、マスターは極めて真剣な声で、こう言った。

「未練を全て断ち切ってから、俺のところへ来い」

そうして、電話が切れた。

――そうだ。蘇生術を行使した瞬間に、自分はお天道様に顔向けできなくなるのだ。

そのことは、一時も忘れたことはない。

だからこそ、覚悟を決めなければならない。

八年目　K月Z日

僕は無事に、音大を卒業した。教師からの最後の言葉は、「また、あなたの音楽を聞かせてください」。

友人たちは、ゆりは、またいつか会おうと言ってくれた。僕は、縁があったらな、とだけ。

――これで、十分だ。

寮を引き払い、そうしてサガへ戻る。親は大喜びで出迎えてくれて、母から強く抱きしめられて、父からは「音楽家になるという夢が、叶うんだな！」と喜ばれた。

そう、その通りだ。
嘘は言っていない、嘘は。
蘇生に移すのは、ばか息子からのささやかなディナーを終えた後だ。

八年目　Z月L日
両親を連れて、焼き鳥屋まで車を走らせた。
まだ目的地にまで辿り着いていないというのに、両親ときたら「運転出来るようになったんだな！」だの「いい男になったのねえ」だのと大騒ぎしていた。正直やめて欲しい、泣いてしまいそうになるから。
そうして、大人気店と噂される焼き鳥屋へ無事に到着した。最初は「入れるかなあ」と思っていたが、なんと三人分の空き席が。俺すごい。
席に座って早々、僕はとうぜん「好きなものを頼んでいいよ」と言った。父と母はにこりと微笑みながらで、「じゃあ、焼き鳥で」。
そうして僕は、自然と、大学時代について語り始めた。それは音楽の話だったり、何よりも友人について語ったり、時にはバイトについての出来事を――思い出があまりにも多すぎて、話している途中で焼き鳥が届いた。
父さんと母さんは、それはもう楽しそうな顔をしながらで、僕の話をずっとずっと聞いてくれていた。
続いて、思い出を口にしながらで焼き鳥を味わっていって――食欲が弾けた。
油ののった肉が、舌をじわりと熱くしていく。更にはタレが、空腹を煽るという矛盾を突き立ててくる。そして飲み込んでしまえば、いよいよもって飢えてしまうのだ。
完全に、虜に陥っていた。
それでも僕は、思い出話を口にし続ける。いま話さなかったら、もう、こんな機会には恵まれないだろうから。
両親は、最初から最後までずっと笑ってくれていた。時折質問をさ

れては、僕ははきはきと「それはね」と返していたものだ。
それは、一時間ほど続いたと思う。
――思い出話も一区切りがついた。食べるペースも、だいぶ落ち着いてきたと思う。
だから僕は、夢を語ったんだ。
「僕は、みんなを笑顔に出来るような曲を作りたいんだ」
「なれるさ、お前なら」
父さんはすぐに、そう返してくれたんだ。
「いまのあなたは、凄く……こう、成長したもの。できるわ、絶対に」
母さんは、夢を認めてくれたんだ。
そのあとは、ろくに言葉なんて口に出来なかったと思う。だって、泣いてしまったから。
父さん、母さん。僕はこれから、親不孝者になります。
許さなくても構いません、縁を切ってしまっても良いです。けれど僕は、そんな父さんと母さんのことを、ずっと愛し続けます。
二人がいなかったら、今頃僕は、つまらない死に方をしていたでしょう。こればかりは否定させません。
本当に、ここまで育ててくれて、ありがとうございました。大好きです。
――栞を挟む

八年目　N月S日
遂に、この時がやってきた。
八年という月日を費やして、僕はようやく、外法に手を染めるのだ。
屋敷の一室に足を踏み入れる。そこには、蘇生術に必要なモノが全て用意されていた。
人目には決して触れてはならないモノ、山田たえという触媒。そして、復活の対象者――もとい、対象犬。
そして、マスターが用意したらしい子犬の死体を目の当たりにした時、僕は、思いきり吐きそうになった。
マスター曰く「車に轢かれたんだろう」とのことだが、犬はツギハ

ギで「修復」されてはいた。しかしそれでも、肌は明らかに腐り落ちていて――これ以上は、書きたくはない。
そして確かに伝わってくる死臭が、脳ミソをぐるんぐるんにかき乱す。心臓が、強く痛みだした。
ひどく青ざめた子犬を見て、僕は改めて実感する。これが、死というものなのだと。
マスターは言った。「で、やるのか。引き返すなら今のうちだぞ」
僕は返した。「やります」
死を弄んだ瞬間、僕は地獄に落ちるだろう。それはわかっている。
けれど僕は、さくらさんをアイドルにしたいんだ。
だから僕は、術を行使した。
手順は大まかに分けて、三つ。
一つ目は、手を叩くこと。
魂を呼ぶための行為だ。
二つ目は、対象者の記憶を最初から最後まで辿り続けること。
そう、最初からだ。生まれた瞬間から死の時まで、自分は対象者と向き合わなければならない。もちろん、目を逸らさずに。
こうすることで対象者のすべてを理解し、感情移入も生じて、魂との距離が近しいものになる。
時間はかかるが、これが、蘇生というものだ。
三つ目は、記憶を見届けた後に名前を呼びかけること。
これには二つのパターンがあって、自我を込めたくなければ淡々と呼びかけを。自我を与えたいのであれば、心の底から名前を呼べば良いらしい。
――例え自我が与えられなくとも、ゾンビ同士の「刺激」で自我が不意に芽生えることもあるらしい。もっとも、自我が無いもの同士では、その可能性はほとんど無いそうだが。
全ては揃った、学ぶべきことも学んだ。
そして僕は、犬を――首輪を見て、「ロメロ」という名前であることを知る。
凄くひどいことを言ってしまえば、ロメロは「練習台」だ。いきな

り人を蘇生させるのは、流石に荷が重い。
だからこそ僕は、ロメロとずっと向き合い、一緒に生き続けることを誓う。
そして僕は、儀式を行おうとして――家族のこと、大学の友人たちのことを、思い返した。
みんな、いい人達だった。感謝している。
そして、源さくらのことを想った。
それだけで、未練なんてもうなくなった。
そして僕は、ロメロへ儀式を執り行った。
生まれた瞬間の記録を、第三者の視点でじっくり見届けていく。そうして楽しかった思い出、不機嫌になった場面、何てことのない一日を追憶していって、最期の瞬間をこの目ではっきりと見届けた。
車にはねられた時、ロメロは、何の声も出していなかったと思う。
そうして僕は、ロメロの遺体めがけて、何度も何度もロメロの名前を口にした。出会ったばかりだし、死んでいるというのに、僕はロメロに対して「生きて欲しい」と心から願っていた。
――そうなるのも、当たり前だ。さっきまで、ロメロと共に人生を歩んでいたのだから。
そして僕は、次に起こったこの出来事を絶対に忘れない。
先程まで横たわっていたはずのロメロが、まるで寒気を覚えたかのようにびくりと震えた。僕の口から、情けない声が漏れたと思う。
ロメロは止まらない。まるで生まれたての子鹿のように、ぎこちなくゆっくりと立ち上がってみせる。動くたびに肉の軋む音が響き、いつか壊れてしまうのではと狼狽した。
自分の欲のせいで、ロメロは苦しんでいるように見える。どこからでも湧いてくる罪悪感が、僕の手足を掴み取ろうとした。
でも、やめない。
僕は、さくらさんをアイドルにしたいんだ。
そしてロメロは、立ってみせた。
ロメロは、甦った。僕の手で。
震えていたはずのロメロは、しっぽを振りながらで僕の方を見つめ

ていた。まるで、子犬のように。
――成功した。そのはずなのに、「こういうものなのか」程度にしか思えていなかった。疲れ果てていたせいだろう。
マスターも、「ま、最初はそんなもんさ」と言っていたし。
ロメロは、僕の足元をぐるぐる回っていた。そんな姿を見て、僕は自然と笑みがこぼれてしまう。
外見は相変わらず「死体」のままだが、それでもこうして見てみると、なんだか愛着が湧いてくる。鳴き声だって、生前と何ら変わらない。
そうして数分が経過しただろうか。ロメロが、僕めがけ何度もジャンプし出したのだ。
一体なんだろうと思い、首を傾げてみれば――わかった。ポケットに入っていた、イカゲソを欲していたのだ。
犬にイカゲソはどうなんだろうと思いながらも、それを与えてみれば、ロメロは「ぐるるぁぁぁ!!」とじっくり味わってくれた。
ビビったが、これで良いらしい。
「――おい」
急だった。
その一声で、安堵から引きずり出された気がした。
「目ぇ、見てみろ」
いったいなんだ。
そう思って、鏡を見て――
僕は、自分の目に絶句した。あまりの変わりように、腰すらも砕けた。
けれども、瞬時に理解できてしまったのだ。
「お前の目は、生きている人の心を弄べるようになった。有無を問わさずにな」
だって僕は、ネクロマンサーなのだから。
「人様の奥底をのぞき見たんだぞ。ただで済むわけがねえだろ」
マスターの言う通りだ。僕は、お天道様が見られないような体になってしまった。

けれども、それではさくらをアイドルにすることが出来ないではないか――そんな焦りすらも察していたのか、マスターは「落ち着け」と言い、
「眼鏡か何かで、自分の目を見えなくすればいい。そうすりゃ大丈夫だ」
ああ、そういうことか。
僕はほっとした。これで心置きなく、さくら達をプロデュースすることができる。
だからか、つい笑ってしまった。
「お前、ブレねぇなあ」
「お互い様でしょう？」
自分にしては、割といい返事ができたと思う。
僕は、ロメロの魂を呼び戻した。これでもう、後戻りはできない。
明日になったら、絶対にやらなければならないことをやる。絶対にだ。

――――

父さん、母さん。
ここまで育ててくれて、音大への道を歩ませてくれて、本当にありがとう。
僕は、絶対に許されるべきではない罪を、犯しました。
そんな馬鹿息子と、血の繋がりなんてあってはいけません。
ですから僕は、父さんと母さんの前から姿を消します。
縁を切ってくださっても構いません、憎んでいただいても構いません。最初からいなかったと、そう思ってくださっても構いません。
どうか、僕のことは探さないでください。尊敬する父さんと母さんを、絶対に巻き込みたくはありません。
これからもどうか、僕と違って、立派にこの世界を生きてください。
僕のように、死んだような人間にならないでください。
これからもずっと、父さんと母さんを愛し続けます。

ここまで育ててくれて、愛してくれて、本当にありがとうございました。
乾太郎より。

――母さん！　これを見てくれ！　母さん！
――もしもし、警察ですか!?　息子が、太郎が、家出を！

サイレンの音が、夜空を伝ってよく響いてくる。何となく見上げてみれば、嘘みたいに星々が瞬いていた。こんな空を見るのなんて、いったい何年ぶりだろう。
絶対に振り向いたりはしない。自分のような外道に、家を恋する資格などはないから。
それでも自分は、ずっと父さんと母さんのことを愛し続ける。甘えであることは自覚しているが、この誓いだけは手放したくはない。
ポケットから、イカゲソを取り出す。
けっして正しくないことをしたはずなのに、どうしても涙が止まらない。
溢れ出る呼吸を抑えながらで、イカゲソを何度も何度も噛み締めていく。乾いた感触とともに、これまでの思い出が頭に流れていく。
――自分のために涙を流すのは、あと一回だけにしよう。泣いていいのは、三度までとか言うじゃないか。
マスターからもらったサングラスを、そっと身につける。
やるべきことは、やった。
乾太郎という男は、いま、このサガから消えた。
自分に、こんな立派な名を名乗る資格はない。
だから、生まれ変わるのだ。乾とはとても似つかわしくない、巽太郎という名前に。
今日のサガ産イカゲソは、なんだか苦かった。

六話

八年目　P月Z日

遂に、さくらを蘇らせる時が来た。

本当、長かったと思う。日記を見てみたところ、八年も経過していたらしい。

いつの間にか、だった。

改めて、身につけるべきスキルを見直す。術はもちろんのこと、特殊メイクも高評価、作詞作曲はじっくり学んだ、舌の回し方にも自信がある。

十分だった。

だから俺は、マスターに頼んで、さくらの遺体を運ばせてもらった。

そして俺は、八年ぶりにさくらと再会を果たした。

顔は灰色に変色しきっていて、肌もすっかり荒れ果てている。強いにおいが、己が感覚を濁らせていく。

そんなさくらを見て、俺は――ここで、「あ」と声が出た。

「マスター。彼女の、生前の記憶はぜんぶ継がれるんですよね？」

「当たり前だろ。何の為の蘇生だ」

――やっぱりだった。

このままさくらを蘇生させたとして、そのまま「アイドルにする」と告げたところで、さくらは「アイドルなんて、いいです」と難色を示すはずだ。だってさくらは、アイドルになるという決意のせいで死んでしまったのだから。

これ以上の失敗なんて、あるはずがない。

そんなさくらに「アイドルになれ」だなんて、死人に鞭を打つのと同義だ。

けれど俺は、どうしてもさくらを輝かせたかった、ステージ上で笑顔を振りまくさくらが見たかった。

円滑に、さくらをアイドルにするには――少し考えて、俺は、マスターにこう乞うた。

「マスター。その、記憶を消しながらで、蘇生させたいのですが」
「はあ？」
「このまま蘇らせても、さくらさんは無気力になるだけなんです」
「……そうかい。じゃあ、そういう方法がねえか探してみるよ」
「本当ですか！」
「ただし、時間はかかるぞ」
「覚悟の上です」
ごめんよ、さくらさん。
しばらくはそこで、どうか眠っていて欲しい。

八年目　M月L日
メンバーの選定を行う為に、ありとあらゆる情報を片っ端から調べ上げてみた。
条件としては、何がしかの伝説を残していること、なるべくならサガ出身であること、そして故人であるという前提が必要になってくる。
――そして、いくつかの人材はマークできた。情報化社会万歳だ。
まずは水野愛、この人は間違いない。新聞でもネットでも、伝説の平成アイドルと大きく謳われているほどだ。――こんな形で、さくらと縁が出来るなんて。
つぎは星川リリィ。伝説の天才子役として、その名は今も語り継がれている。リリィがメンバーになれば、いわゆる「愛されポジション」が完成するだろう。サガ出身者であることも、すごくうれしい。
そして紺野純子。「アイドル　サガ　伝説」で検索してみたところ、「飛行機でサガへ向かう途中に、無念の事故死を遂げた伝説の昭和アイドル」と出た。
サガ出身者ではないが、間接的にサガには絡んでいる。一世を風靡したということもあって、頼れるメンバーになってくれるに違いない。
さらに二階堂サキ。「アイドル　サガ　伝説」で中々引っかからなくなったので、「サガ　伝説」で検索をかけてみたのだ。すると「サガ

で語り継がれる、伝説の特攻隊長」という字面が。男として、真っ先にクリックしてみた。
記事によると、サキは極めて身体能力が高く、それでいて皆を引っ張っていく明快な女の子だったらしい。
なるほど。アイドル未体験者ではあるが、確かなカリスマがあるようだ。こうしたメンバーが一人でも居てくれれば、少しのトラブルも何やかんやで乗り越えてくれるだろう。
こうして、メンバーの選定は大方決まった。さくらの記憶を消す方法を模索しながら、このメンバーの蘇生を順次行っていくことにする。

追記
蘇生の方針だが、自我はあえて込めないことにする。新生アイドルグループの命を込める役目は、是非ともさくらさんに任せたいからだ。
こうすれば先輩後輩の関係なんて生じないし、人間関係における置いてけぼりも発生したりしない。そして何より、「自分の手で活動が始まった」という成功体験を掴ませることができる。
さくらさんには、楽しい第二の人生を送ってほしいのだ。

八年目　M月S日
方針は決まった、迷いもない。だから、二階堂サキを蘇らせる。
サキの遺体を前にして、多大な緊張感が生じた。人を蘇らせるという、業が降り掛かっているせいだろう。
たぶん、この感覚は治らないと思う。けれどそれで良い、人を蘇らせるというのは、つまりはそういうことだ。
そして俺は、手を叩きながらでサキの記憶を追憶していった。
経歴が経歴だからか、派手なものが多い。男顔負けのケンカっぷりに、目が離せなくなったことも数回ほど。さすがは伝説の特攻隊長だ。
――そんな彼女だからか、死因も「らしい」ものだった。
記憶は見届けた、サキへの感情も近しいものになった。

サングラスを外し、物言わぬサキの両肩を掴んで、そして何度も何度も、サキの名前を呼びかけていく。感情が、こぼれ落ちそうになりながら。
それを繰り返して、何分も過ぎただろうか。
死んでしまったサキは、本来なら絶対に返事をしたりしない。
けれども俺は、その絶対すら覆してしまうような所業を執り行っている。
命に差なんてない。けれどもサキの、人間の名前を口にするたびに、強烈な自己嫌悪に襲われそうになるのだ。
――さくらの笑顔を思い起こす。
そのとき、サキの体がびくりと震えた。
ロメロと同じように、サキも必死に立ち上がろうとする。新たな生を掴み取ろうと、両足まで震わせながら。
肉の軋む音に対して、俺は耳を塞ごうとした。
けれど、できるはずがなかった。サキの魂に対して、それは無礼すぎる。
時間をかけて、そして、サキは間違いなく甦った。自我がないから、唸ることしか出来ず、歩き方もぎこちなかったけれど。
――サキは、間違いなく甦った。
これでもう俺は、サガの日なんて見られないだろう。他でもない、サガ人の魂を弄んだのだから。
けれど、これでいい。
俺は、さくらさんをアイドルにしたいんだ。

八年　M月Z日
次は、水野愛の蘇生を執り行った。
物言わぬ愛の遺体を見て、俺は、大きな息が漏れた。
そうだ。愛のお陰で、さくらは新しい人生を歩もうとしたんだ。そういった意味では、愛は俺の恩人というべき存在なのかもしれない。
だのに、自我を抜きにして蘇生とは。俺はつくづく外道だ。
だが、やる。

俺は、愛の記憶を追憶していった。彼女の子供時代、アイドルになろうと決意した瞬間、幾度も映し出される努力の光景、ライブ会場で輝く瞬間、真っ白になった光景――

いまでも、そのことははっきりと思い起こせる。

ひどい、ものだった。

そして俺は、愛の名前を何度も何度も呼びかけた。溢れ出そうになる感情を、押し殺しながら。

繰り返していって数分後。水野愛は、間違いなく新たな生を受けた。

命を賭けてでも、俺はサキを、愛を、ロメロを守る。

八年目　I月L日

次は、紺野純子の蘇生を執り行うことにした。

昭和のアイドルの遺体と対面し、まず最初に思ったことは「伝説級の容姿だ」だった。

その上で歌唱力も抜群だったのだから、それはもう一世を風靡してしまうだろう。これは、蘇らせるほかない。

そうして俺は、純子の記憶を追憶していった。性格はいたって物静かで、釣りを行っている場面が多い。趣味だったのだろう。

そして純子は、小学生の身でありながらアイドルへの道を歩み始める。やはり困難極まりないものだったが、持ち前の努力っぷりと、類まれなる素質によって、若くして頭角を示していった。

そんな純子だが、時には自虐に陥ることもあったようだ。しかしそれでも、必ず立ち上がっているのだが。

そうした下積みを重ねていって、純子は遂にテレビへ出演する。高校生だった。

そこからは、もはや絶頂期といって差し支えない。テレビ出演はもちろんのこと、新聞だって毎日が純子祭り。音楽も連続でヒットするなど、昭和はまさに純子の天下だった。

――そして、運命の日がやってきた。

飛行機でサガへ向かっている最中に、突如としてエンジントラブル

が発生し、何も出来ないままで墜落死してしまったのだ。
純子らしくない、あまりにも不運な最期だった。
だからか、後に「伝説」の昭和アイドルと謳われるようになってしまった。
――わかった。
純子の無念を、俺の手で晴らそう。失われた純子の輝きを、俺の手で再び灯してみせよう。
それが、ネクロマンサーの義務だ。
そして純子は、この平成の世に返り咲いた。

八年目　J月S日
今日は珍しく、マスターから「人材」を紹介された。いや、あれは推薦といってもいいだろう。
これまでは「好きにしろ」のスタンスを貫き通していたのだが、ここにきていきなり「俺の恩人をアイドルにしてくれねえか？」である。そりゃあもう戸惑った。
狼狽する俺に、マスターも察してくれたのだろう。「伝説の花魁だから、芸には秀でてるぜ。必ずお前の力になる」と、積極的にプレゼンしてくれた。心なしか、表情にも真剣味がある。
「分かりました。あなたには数え切れない恩がありますから、それは構いませんが……ですが、本当にいいんですか？」
「ああ。こいつを……ゆうぎりを、もう一度輝かせてくれねえか？」
そういうことか。
俺は、何も言わずに頷いた。
ゆうぎりの遺体を目の当たりにして、俺は真っ先に言った。「いつの時代のものですか？」
マスターは、平然と言った。「幕末だ」
マスター曰く、ゆうぎりはマスターの恩人であるらしい。そうなれば、ゆうぎりとは知り合いの間柄になるわけで、
「マスター」
「ん」

「いくつですか？」
「適当言っていいぜ」
つまりは、そういうことだった。
そんなやりとりの後で、俺はゆうぎりの記憶を追憶していって――ゆうぎりを無事に、蘇生させた。
「マスター」
「ん」
俺は、笑っていたと思う。
マスターも、なぜ笑われたのか自覚しているのだろう、気まずそうに苦笑していた。
「俺と、あんまり変わらないじゃないですか」
「だから、お前のことがほっとけなかったんだよ」
俺は、マスターとは出会うべくして出会ったらしい。
だって、マスターとゆうぎりは――やめておこう、書いたら馬に蹴られる。

八年目　S月Z日
次は星川リリィだ。新生アイドルグループの中では、一番のアクセントとなってくれる子だろう。
精神性ショックで亡くなったというが、一体どんなことが起こってしまったのだろう。何か恐ろしいものでも見たか、突発的なものなのか。
いずれにせよ、後でわかることだ。
――さて。
リリィの遺体を前にして、思わずため息が漏れた。
子供だろうとも、死ぬ時は死ぬ。死というモノの前には、「子供だから」という理論は通用しない。
けれど、いくらなんでもこれは、あんまりだと思う。
まだ若いのに、天才子役として輝いていたはずなのに、今となっては青ざめた死体としてここにいる。それがひどく物悲しい。
だからこそ、リリィを蘇生させようと決意した。彼女には、さくら

と共に輝いて欲しい。
――子供の魂すらも弄ぶ俺は、いずれは地獄に堕ちるだろう。
そして俺は、リリィの記憶を辿っていった。
――え？
蘇生は完了した。
しかしだ、いやしかし、だ。「あれ」には流石に驚いた。
だが、リリィが伝説の子役であることに変わりはない。またしても、頼もしいメンバーが増えたのだ。
基本的なメンバーは、これで揃った。後は、さくらの記憶を改ざんする方法を見つけなければ。

八年目　R月L日
急遽だが、山田たえをメンバーへ加えることにした。
それもこれも、たえには数え切れない恩義があるからだ。彼女がいなければ、サキ、愛、純子、ゆうぎり、リリィ、ロメロの蘇生はままならなかっただろう。
ほんとう、長らく世話になった。
だから俺は、たえを輝かせようと思う。
自我が若干失われているが、体はしっかりと動く。イカゲソへの飛びかかりは一見だ。
彼女には、ダンサーとして働いてもらおう。

八年目　I月Z日
今年も、アイアンフリルのライブへ立ち寄ってみた。
今のアイアンフリルには、「かつて」のメンバーは一人も残ってはいない。色々な事情があって、彼女たちは散らばっていってしまった。
それでも、アイアンフリルは今も歌い続けている。活き活きと、ステージ上で踊り明かしている。
曲調も今風だからか、観客もノリにノれている。かくいう自分も、少しばかり体を動かしてしまっていた。やはりアイアンフリルは強い。

――この大勢の観客の中に、水野愛へ想いを寄せている者はいるのだろうか。
たぶん、いるだろう。
だって彼女は、不動のセンターなのだから。

九年目　T月Z日
新年早々、さくらの記憶を改ざんする方法が見つかった。
マスター曰く「こいつぁ難しいぞ」とのことだが、確かにこれは困難だ。何せ、頭を切開しつつ「処理」を施さなければいけないのだから。
嫌悪感、などはない。
ただ、さくらを傷つけたくはなかった。
――何を今更だ。自分はこれから、さくらさんの魂を弄ぼうとしているというのに。
そうだ。サキや愛、純子にゆうぎり、リリィとたえを輝かせる為にも、さくらさんを蘇らさなければならない。
何よりも俺は、さくらさんの笑顔を見たいんだ。
だから、やってやる。記憶の改ざんも、蘇生も。

九年目　B月Z日
プロデューサー脳という本を買ってみた。最近発売された本らしいのだが、なるほど、これは確かに参考になる。特に笑顔と交渉術と粘り強さは必要不可欠であるらしく、我ながら「当たっていたんだな」としんみり。
まず最初に、「プロデューサーにピッタリのファッションはこれ！」が目に飛び込んだ。なるほど、服装から入るのは基本だ。
そうしてページを開いてみれば、「ミーティングをしよう！」の文字が。
しまった。何をするにおいても、ミーティングは必要になってくるじゃないか。
そうして俺は、ゾンビ一同を集めようとして、集合させようとして、

導こうとして、だめだった。自我が無いが故に、誰もが四方八方へ歩き回るのだ。
どうしたものかなあと苦悩していたところ、空気を察したらしいロメロが、わんわんのふた声でゾンビ達を先導しているではないか。
なるほど。ゾンビとゾンビだからこそ、仲間意識めいた感情を本能レベルで抱いているのかもしれない。
俺はロメロに対して、他のゾンビたちを地下室へ連れていくよう指示を出す。ロメロは特に何ら不満を抱くことなく、ゾンビ達を目的地まで導いてくれたのだった。
ミッションコンプリート後、俺はロメロへイカゲソを与えた。元気よく食べてくれて、何よりだ。
相変わらずゾンビ達は自由に動き回っているが、ここから出ることは出来ない。ミーティングにはならないだろうが、予習をしてもバチは当たらないはずだ。もう当たっているか。
――数分後になって、俺はひどくひどく実感した。こんな薄暗い場所で、生真面目なトーンでミーティングを行っても、単に気が滅入るだけだと。
ゾンビ環境だからか、余計にそう思う。仮に自我が芽生えたとしても、じめじめとした雰囲気でのミーティングなんて士気が上がらないに決まっている。
これは、改善の余地ありだ。

九年目　G月Z日
今日も今日とて、流行を追う為に人気のクイズ番組を視聴していたのだが――「これだ！」と叫んだ、立ち上がりすらした。
何に衝撃を受けたかって、司会者の立ちふるまいだ。明るく声を出しつつ、時にはギャグで場を沸かして、存在感を保ったところで次のクイズへ移行させる。これこそ、ミーティングに欲しかったものだ。
そうして俺は、芸人のノリでミーティングを行ってみせた。結果としては、「あ、案外いけるんじゃね？」だった。
何せ自分の気分がノリにノりまくっているから、自然と口も動くし

頭だって回る。ややオーバーなアクションをしてしまった気もするが、場所が場所だ。これぐらいが丁度いい。

――そういえば、大学時代もだいたいこんな感じだった。その経験が今になって活きていると思うと、なんだか感慨深い。

ゆりは、元気に生きているだろうか。

何度かミーティングの手法を試してみたが、結局はこのノリに落ち着いた。このスタイルならば、唐突にアレコレ言ったところで何ら不自然さは生じないだろう。もしかしたら煙たがれるかもしれないし、距離を取られるかもしれないが、「とくべつ」好かれるよりは良い。メンバーには、円滑にアイドル活動を続けていって欲しいのだ。

九年目　D月Z日

記憶改ざんの練習を、今日も行った。

これは、人を蘇生させるよりもかなり難しい。ただでさえ手順が多いというのに、一つでも失敗してしまったら、さくらの自我は永久に失われてしまうのだ。

それだけは、命を賭けてでも阻止しなくてはならない。

だから俺は、納得がいくまで何度も何度も練習をする。

九年目　Q月Z日

メイクの方だが、これは早めに仕上げられるようになった。手が勝手に動いてくれるのだ。

作詞作曲もそうだ。まずテーマを考えてみれば、それに関したフレーズが次から次へと思いつくようになった。流行りものを追っていったかいがあるというものだ。

喋りの方だって順調だ。特に口ごもることもなくミーティングを行えたし、マスターとは良い飲み仲間として付き合っていけている。上手くいかない時は、いつもあーだこーだと愚痴を聞いてもらっていた。

――あとは、記憶改ざんをモノにするだけだ。

十年目　T月Z日
ついに、記憶改ざんをモノにした。まったく、俺はどこまで堕ちるんだろうな。
まあ、それはどうでもいい。さくらさんが輝ければ、それでいい。
記憶改ざんは明日、行う。

十年目　K月Z日
――終わった。
さくらさんへの記憶改ざんは、これにて完了した。何度も確認してみたが、恐らくミスなどはしていないだろう。
ほっとした反面、少しばかりため息が漏れる。
彼女の人生は、まちがいなく不運の連続だった。それこそ、死ぬほどツイていなかった。
ほんとう、ひどい人生だと思ったことだろう。不運に潰されて、無気力に陥った時期もあった。
けれどさくらさんには、たくさんの友達がいた、愛してくれる両親がいた、努力に焦がれた日々があった、アイアンフリルに救われた喜びを抱いていた。
それら全ての思い出を、俺の私欲でぜんぶ奪い取ってしまった。
まったく、さくらさんを不運にさせているのは俺なんじゃないのか。
――いいや、迷ったりなんかしない。
蘇生術は、数日後に執り行う。
神よ、止めてみるなら止めてみるがいい。俺は必ず、彼女を輝かせてみせる。

――

夜になっていた。
蘇生術を使うのに、時間などは関わらない。単に、勇気を振り絞れなかっただけだ。

人の蘇生なんて、これまで何度も執り行ってきたはずなのに。だのに源さくらが相手となると、万が一の失敗ばかりを考えてしまうのだ。

自分の不手際で、さくらが正真正銘のゾンビに成り果ててしまったら。その時はきっと、すべてが駄目になってしまっていると思う。

――さくらの不幸にだけは、なりたくない。

だからこそ、蘇生へ踏み込めない。さくらの遺体を前にして、何もしない時間が刻々と過ぎていく。

「ま、ゆっくり決めな」

マスターはいつまでも、俺の背中を見守ってくれている。

振り向いても、マスターは事を急がせたりはしない、止めもしない。すべては、自分の判断にかかっている。

さくらの遺体の前で、そっと深呼吸する。

さくらの青ざめた顔が、ろうそくの火にふわりと照らされている。目は、あの日からずっと閉じられたまま。時の流れのせいで、肌という肌が腐敗しきっていた。

さくらがこうなって、もう十年が経つ。

それでも俺は、今も、源さくらのことが愛おしい。

――ほんとう、色々なことがあった。まるで走馬灯のように、これまで全てのことを思い出す。

それから、いくつの時が経過しただろう。

過去を振り返ってみて、俺は改めて実感する。さくらがこんなことになってしまって、十年も経ってしまったという事実に。

俺の腹の中から、熱めいた使命感が湧いて出てくる。幸せにしたいという欲望が、どうしても止まらない。

俺は、さくらを幸せにする。輝けるアイドルにしてみせる。それが、プロデューサーの義務だ。

さくらの記憶を、追っていく。

元気の良い女の子に生まれて、ふつうの環境に育まれた。小学三年の頃にテレビドラマに感動して、その影響で白雪姫になろうと努力した。

けれど、失敗した。
、テレビ出演したマラソン選手に感銘を受けて、リレー選手になろうと精一杯努力した。
けれど、失敗した。
マラソン選手の「諦めない」という言葉を支柱にして、さくらは全力で頑張った。
けれど、失敗した。
ぜったい諦めないと、また頑張った。
けれど、失敗した。
生まれ変わるために猛勉強して、趣味すらも押し殺して、今度こそ勝てると思った。
それでも、情に負けてしまった。
そうしてさくらは、積み重なる失敗を前に疲れ果ててしまった。
けれど、さくらは出会ってしまった。水野愛という、努力の人に。
だからさくらは、もう一度だけ頑張ろうと決意した。輝くために、心身を磨き上げていった。
――ある日、さくらはアイアンフリルのＣＤを机の上から落としてしまった。それを僕が拾い上げて、さくらさんに手渡して、
ありがとう、乾君
さくらさんは、今度こそ報われようとして、
いま、俺の目の前で横たわっている。
追憶を終える。
俺は無表情のまま、さくらの肩に手をかける。これまで幾度となく行われた手順を、踏むために。
「源さくら」
ロメロを蘇らせたように、名前を呼びかけていく。
「源さくら」
二階堂サキを蘇らせたように、名前を呼びかけていく。
「源さくら」
水野愛を蘇らせたように、名前を呼びかけていく。
「源さくら」

紺野純子を蘇らせたように、名前を呼びかけていく。
「源さくら」
ゆうぎりを蘇らせたように、名前を呼びかけていく。
「源さくら」
星川リリィを蘇らせたように、名前を呼びかけていく。
「……源さくら」
最初から、自我を与えるつもりでいた。
「源さくら」
けれど、自我を与えないという選択をとったとしても、それを決行することは無理だったと思う。
「源さくらっ」
感情が、どうしようもなく止まらないから。
「源さくらっ」
目を覚ましてくれ。
「源さくらっ」
僕はずっと、君のことが好きだった。
「源さくらっ」
だから、君には幸せになって欲しかった。
「源さくらっ」
僕でよければ、いくらでも力になる。
「源さくらっ」
僕の力で、アイドルにしてみせるから。
「源さくらっ」
だから、また笑顔を見せてほしい。
「源さくらっ」
また、僕に挨拶をしてくれ。
「源さくらっ」
それだけでいい。愛し愛されるなんて、叶わなくてもいい。
「源さくらっ」
僕は地獄に堕ちてもいい。さくらには、輝かしい未来を歩んでほしいんだ。

「源さくらっ」
僕はただのプロデューサーとして、君をずっと見守るよ。
「……源さくらぁッ！」
――君と、結ばれたかった。
さくらの指が、ぴくりと動いた。
声にならない声が漏れたと思う。そうして、両肩を掴んでいた手をそっと離す。
さくらの手が、体が、頭が、小刻みに痙攣し始める。獣のような唸り声とともに、自分の力で立ち上がろうとしていた。
肉の軋む音を耳にして、心臓が張り裂けそうになる。何度も見た光景であるはずなのに、極度の緊張感がつきまとう。心の中で、何度も何度も応援し続けた。
それから、数秒、数分が経ったと思う。
さくらは自分の力で、この地に立ち上がってみせた。姿勢は悪いが、まちがいなく、甦った。
焦点の合わないさくらの瞳と、俺の目が合う。しばらくはそのままでいて、ゆっくり、ゆっくりと近寄ってきて――俺の方へ、力なく倒れ込んだ。
「あっ、あっ」
情けない声が漏れる。
後ろから、マスターが「おうおう」と笑い、
「頭をいじくったからな。そのせいで、まだ意識が定まっていなかったんだろう」
さくらと密着しているせいで、ロクに返答も出来ない。
「時間が経てば、嬢ちゃんに自我が芽生えるさ。……お前は適切な処置を行った、だから大丈夫だ」
上手くいったかどうかは、まだわからない。けれど今は、そんなマスターの言葉がとても心強かった。
「じゃあ、そろそろいいか？　俺はお邪魔みたいだしな」
「か、からかわないでくださいっ」
そうしてマスターは、「はっはっは」と笑いながらで地下室を後にし

た。
――ため息。
さくらと俺は、今もくっついたままだ。その分だけ、強いにおいが鼻腔をかき乱そうとする。腐敗した肌は、普通なら意識に悪影響を及ぼすだろう。
けれども俺は、そんなさくらさんのことが好きだった。これからもきっと、そうだろう。
身を預けたままのさくらに対して、俺は――
「……おはよう、さくら」
そっと、地面へ横たわらせた。

――

十年目　W月Z日
さくらの意識は、徐々にだが目覚めつつある。簡単な言葉なら、「うん」と頷いてくれるのだ。
だから、今は待とう。さくらが目覚めたその時こそ、ゾンビランドサガプロジェクトの始まりなのだ。
その為なら、俺はいくらでも踏み台になってみせる。
それでいいんだ、それで。

七話

さて。

そろそろ、特殊メイクの「本番」に移ろうと思う。道具はバッチリ揃っているし、照明は順調に稼働中。大雨が降りしきる中で、さくらは横たわったまま動かない。

メイクを行うにおいては、最高のシチュエーションだろう。

けれど、なかなかどうして踏ん切りがつかない。

そんな風に陥っている理由は、極めて簡単。めちゃくちゃ恥ずかしいからだ。

――だって、好きな人の肌に触れるんだぜ。

だからなるだけ、「これはただの特殊メイク」と考える。

「ただ」と「特殊」を違和感なく組み合わせている時点で、平常心も何もあったものじゃない。

だめだ、落ち着け。別に、やーらしかをしでかすつもりはない。さくらの素肌を、お化粧で覆い隠すだけだ。

そうでもしなければ、死者であるさくら達に陽の光など浴びせられない。アイドルデビューなんて、夢のままで終わってしまう。

お前の十年間は、羞恥心一つで潰されるようなタマなのか。違うだろう。

ああ、違うとも。

巽太郎は、そっと筆を手にとって、筆先をさくらの顔へ近づけていって――

さくらと、目が合った。

情けない声が漏れた、腰まで砕けた。

さくらの方はといえば、ごくゆっくりと、その身を起き上がらせていく。そうして女の子座りをしたまま、太郎から決して目を離さない。

まさか、芽生えた？

期待と不安を胸に抱えながらで、さくらの方に姿勢を傾ける。対してさくらは、「うう」の唸り声を上げた。

――まだ、か。
でも、それでいい。焦らなくたっていい。
一瞬だけ、雷鳴が部屋中を白く上塗りする。それに照らされたさくらの顔色は、やはり真っ青だった。
――よし。
このままのさくらだっていい。けれどやっぱり、さくらの人生に色を染め上げてあげたい。
今度こそ、筆を手に取る。
ゆっくりとさくらに近づいていって、冷え切ったさくらの頬に手を添える。何だか微笑んでしまいながら、太郎はさくらの顔色に命を吹き込んでいく。
しばらくして、生前の顔を完全再現させられた。あまりの出来栄えに、俺凄いとまで呟いてしまった。
――ふう。
顔を塗っただけなのに、ひどく疲れた。
異性と、はじめて触れ合ったからかもしれない。
しかもその相手は、よりにもよって源さくらだ。そりゃあ疲れもする、両肩から息だって漏れる。
床の上に腰を下ろしながら、太郎はさくらの顔を見る。
改めて目にしてみても、さくらの顔色は生前と変わらないように見える。ゾンビであることに違いはないが、いまのさくらは歩けもするし、簡単な返事もこなせるし、肌色だって取り戻せた。
いまこの時をもって、さくらは生まれ変わった。太郎は、臆せずそう思う。
「うう」
さくらが、ゆっくりと立ち上がった。
一体どうしたんだろうと、太郎は首をかしげる。さくらはそのまま、鏡のある方へふらりと歩んでいき、鏡に映し出された己が顔を無表情で眺め続け、
「……あ……ああ……」
何の前触れもなく、さくらは後ろ向きに倒れた。

太郎はすかさず立ち上がり、同時に「ごん」という音が部屋じゅうに反響した。さくらの頭が、床に思いきりぶつかったのだ。
やばい、大丈夫なんだろうか。太郎は無我夢中で、ぴくりとも動かないさくらを抱きかかえる。そしてそのまま、さくらの表情を伺ってみて――
さくらの両目が、絶句していた。
「え」の一声が出た。
半ば焦りながらで、場を推測する。この状況と顔色からして、何か恐ろしいものでも見て気絶してしまったのだろう。
その恐ろしいものとは、メイクに染まったさくらの顔、なのだと思う。
最初から最後まで見届けていたからこそ、そう断言できる。
ただのゾンビだったら、こうはならないだろう。けれどさくらは、自我が芽生えつつある特別なゾンビだ。
だからこそ、「ゾンビの顔じゃない、私じゃない。あれ、私ゾンビだっけ？　あれ？」と衝撃を受けたのだと思う。あくまで推測でしかないが、きっとそうだ。
そっと、さくらを床に寝かせる。
そうやって納得してみれば、急に体の力が抜けていって――さくらの「素足」が、目に入った。
あ。
間抜けな声が漏れた。
そうだ。メイクを施さなければいけない箇所は、何も顔だけではない。
「体のすべて」を、生前のように処理しなければいけないのだ。
――塗るべき部分を考えてみて、巽太郎二十七歳は頭を抱えた。唸り声だって上げた。
それでも、やらねばならないのだ。
男には、そういう時が訪れるものなのだ。
もう一度、筆を手に取る。史上最大の戦いが、いま、始まろうとしていた。

――――

Z月Z日

さくらに、渾身の特殊メイクを施してみた。みたのだが――見事、大成功に終わった。ただ、ものすごく疲れたけれど。

まさかこの日を以て、彼女と触れ合う日が来るとは。世の中、どう動くかわかったものではない。

煩悩を抱いたことは認める、それもまた「好き」ということだし。

けれど、この想いを打ち明けるつもりはない。

俺は、さくらの魂を弄んだ外道なんだ。

俺とは、決して結ばれてはいけないんだ。

俺はただ、輝く君さえ見られれば、それで良い。

――――

日記を書き終え、太郎はうんと背筋を伸ばす。首を鳴らし、だるそうに欠伸を漏らして、凝りに凝った右肩を左手で揉みしだき始めた。

寝る前は、だいたいこんな流れだ。

ふたたび欠伸を垂れ流しながら、ノートのページを閉じようとして――もう二十冊以上になるんだなと、ふと思う。

日記を書き始めた理由は、ごくごく真面目なものだった。改善点を見直すため、成功体験を忘れないようにしたいから、自分への励ましになると思って。

けれど数年前から、「日記を書きたいから」に移り変わっている気がする。何というのか、日記で一日を締めないとモヤモヤしてしまうのだ。

何だか脱線してしまっているが、それはそれで良いと思う。ろくに趣味も持たなかった身としては、日記はなかなかどうして良い刺激になってくれていた。

時折日記を読み返しては、「そんなこともあったっけ」と思う。

しおりを挟んでいるページを見ては、ため息をこぼすこともある。こういった感慨は、日記でしか味わえないものだ。

――さて。

そろそろ眠ろう。太郎は、部屋の電気を消そうとして、天井ごしから、大きな物音が反響した。

地響きすらも伝わってきて、太郎は声にならない声を出す。眠気なんてあっという間に吹き飛んで、代わりに嫌な予感めいたものを抱いて、そのまま二階まで駆けつけていき――さくら以外のゾンビ達が、廊下でうろついているのを目にする。よく見てみれば、扉のすりガラスが割れていた。

――まさか

さくらの安置所めがけ、全力で駆けつける。ドアノブを思い切りひねると同時に、扉を体当たりでこじ開けて、

さくらが、どこにもいない。

太郎は、屋敷の外にめがけ走る。なんでここはこんなに広いんだ、なんで雨なんか降ってやがるんだ――

雨。

その一文字で、ふと我に返る。

降り注ぐ雨音を耳にしながらで、太郎の口から「まずい」が漏れた。いまのさくらには、自慢の特殊メイクが施されたままだ。下手なことさえ起こらない限りは、ゾンビバレなどは起こらないはずである。

そう、下手なことさえ起こらなければ。

水を、思いきり浴びない限りは。

万が一に備えて、太郎は「使えそうなもの」を雑に探し始める。なるだけ「大丈夫だ」と思い込もうとするが、さくらという人はここぞという時に災難を呼んでしまう体質持ちだ。そのため、恐れるべき万が一――人と出会ってしまうという場面を、想定しなければならない。

物置部屋に足を踏み入れ、秒も考えずに使えそうな「武器」を手にする。そのまま傘も回収しては出入り口をブチ開け、すぐさま傘を開いては闇雲に雨の中を駆けずり回った。

そうして、数分ほどが経過した後だったと思う。
「助けてください、お巡りさん！」
鍛えられた聴覚が、さくらの声を決して聞き逃さなかった。
数年ぶりに、とにかく全力で走り込む。呼吸は乱れに乱れ、思いきり水たまりを踏み、雨のせいで前すらよく見えない。荒れた声を吐き出し、頭の中が良くない予感でいっぱいになって、次の曲がり角まであと三歩、二歩、一歩と踏み越えていき、
居た。さくらと――舌打ちする――腰を抜かした男の後ろ姿が、太郎の視界に入る。
まずい、早く何とかしないと。そう思っても、勇気を振り絞れないせいで両足が、
弾けた音、
それのせいで、時間の流れに粘つきが生まれたのだと思う。
だから、目と鼻の先の現実を把握出来たのだと思う。
さくらは、拳銃に撃たれていた。
頭が真っ赤になっていた。
半ば自我を失いながら、男の背中めがけ突っ走っていき――「武器」であるスコップを、男の頭めがけ思いきりブン回していた。
嘘みたいな金属音が、雨の中に反響する。
今になって、警察帽の存在に気づいた。
しまった。いやそれよりも、
「さくら」
倒れ込んでいるさくらと、目が合ったと思う。
喉の近くに銃痕が生じてしまっていたが、たぶん死にはしないだろう。さくらは、ゾンビなのだから。
――さて、
警官が目を覚ます前に、さくらを屋敷に運ばないといけない。だから太郎は、躊躇うこと無くさくらを背負ってみせた。
服ごしからも、さくらの冷たい体温が伝わってくる。
蘇ろうとも、死人は死人なのだと実感する。
けれども、さくらは確かに喋った。そして、こんなところにまで駆

けつけた。トラブルには巻き込まれてしまったけれど、それも生きているからこその出来事だ。それがどうしようもなく嬉しい。
とりあえず今は、安全な場所まで運ぼう。さくらも疲れ果ててしまっているはずだ、ゾンビだけれど。
話をするのは、その後でも良い。
――気絶している警官を、一瞥する。
雨の当たらない場所へ、警官を移動させておいた。これで少しは、もやもやも晴れてくれるだろう。
何より彼は、サガを守ってくれる警官なのだ。決して、無下にはできない。

――

さくらを部屋に横たわらせて、もう数分が経過していた。
雨音を耳にしながら、太郎はずっと、さくらの目覚めを待ち続けている。それもこれも、さくらに状況を説明するためだ。
――頭の中で、さくらへ何を言うべきかはしっかりシミュレートしておいた。何度も何度も。
自分はさくらのプロデューサーで、さくらはサガのアイドルで、ゾンビで、自分の正体は絶対に明かさない。
自分が乾太郎とバレてしまえば、さくらの新しい人生に支障をきたす可能性が出てくる。私情丸出しだと暴かれれば、メンバーの間に不平不満が生じてしまう。
だから自分は、正体を明かさないのだ。
さくらの笑顔さえ見られれば、それで良いから。
――乾太郎がネクロマンサーだと、バレたくないからだろう？
太郎の本心本音が、そうやってささやいてくる。
ああそうだ。太郎は、横たわるさくらに対して頷いた。
ネクロマンサーなんて、プロデューサーなんて、独走めいた精神力があってナンボだろうが。
自分はこんな野郎だ。だから、何としてでも己が願いを叶えてみせ

る。絶対に、彼女たちを幸せにしてみせる。
両肩で、思いきり息をする。
ふたたび、さくらの寝顔を見届けて、
「う、」
太郎の体が、嘘みたいに震えた。
「あ、あれ。こ、ここは……？」
そして、さくらと目が合った。
間――さくらが、小さく悲鳴を上げた。腰が抜けたままで、緩慢に後ずさっていく。
それを見た太郎は、思う。
――生きている。
そう、思う。
「あ、あ、あの、え、えっと……ここは、どこなんですか？」
そして、さくらは頭を抱える。
「あ、あれ？　私はだれ？　なに？　何も思い出せない」
どうやら、記憶の改ざんは成功したらしい。自我も、見ての通り芽生えているようだ。
どうして自我が芽生えたのだろう。もしかして、先ほど頭を打ったからだろうか。
――いい。術の考察は、あとでいくらでも出来る。
それよりも、今は、
「お前は源さくらだ」
「え？」
続きを言え。シミュレート通りに口を動かせ。
「十年前に、お前は死んだ。ゾンビィとして」
噛んだ。
緊張のせいで、ゾンビの名がファンシーになってしまった。
「ぞ、ぞんび……し、死んだ？」
「そうだ」
「じゃ、じゃあ、どうして私は蘇ったんですか？」
「アイドルになって、サガを救うためだぁ」

だめだ。さくらと話すと、こうも発音が上ずってしまう。
――けれど、少しも不快なんかじゃない。
こうしてさくらと話せて、体なんてものすごく熱くなっている。機嫌なんて、数年ぶりに最高潮だ。
緊張というよりは、はしゃぎすぎて発音が二の次になってしまっているのかも。
「あ、あの。どういうことですか？　いったい……」
わけがわからないという様子で、太郎に疑いの目を投げかけてくる。
そうだよな、ほんとうにそうだよな。わけがわからないよな。
けれどさくらには、何の後腐れもなく前へ走っていって欲しいんだ。だから自分も、まくし立てる調子で喋ってしまったんだ。
――ゆっくりと、さくらへ近寄る。
さくらの瞳が、困惑とともに大きく揺れ動く。それは、自我があるからこその感情表現だ。
「さくら」
俺は敵じゃない、不運から守る為の盾だ。味方なんだ。
そう示すために、俺は言葉ではなく、
「あっ」
さくらの顎を、そっと傾ける。
さくらの瞳に、俺が映り込む。
この瞬間を以て、俺は報われた。
「俺に、すべて任せろ」
「え？」
だから俺は、ようやく太郎の名を捨てられる。
「……俺は」
これからは源さくらを、二階堂サキを、水野愛を、紺野純子を、ゆうぎりを、星川リリィを、山田たえを、ロメロを、サガを幸せにするために、俺はこう名乗ろう。
「――俺は、巽幸太郎（僕は、乾太郎）」
そして、神へ宣言してやるのだ。

「お前(君)を、アイドル(幸せにしたい男だ)にする男だ」

源さくら編

一話

２０１８年　４月８日

これで、俺の人生に一区切りがついた。これからは、彼女たちの物語が始まるのだ。

これから先は、いったいどうなるかは分からない。アイドルへの道のりは、長く厳しいものになるだろう。

だが俺は、プロデューサーとして、ネクロマンサーとして……さくらに恋した男として、出来る限りのサポートを行うつもりだ。

彼女たちを幸せにする為に、サガを救うために、俺はその踏み台となろう。

彼女たちを、徒花にさせたりはしない。

俺の戦いは、いまから始まる。

――――

今ごろさくらは、地下にあるミーティングルームへ待機しているだろう。そこには、他のゾンビィ（気に入った）たちも同席しているはずだ。

さくらには今後のことを、そして仲間について知ってもらわないといけない。

――階段を降りながら、やるべきことを思い返す。

ミーティングルームは、とにもかくにも暗い。そんな場所で大真面目に進行しようものなら、士気も何も上がらないままで活動が始まってしまうだろう。

だから、バラエティ番組の司会者らしく立ち回るのだ。明るく元気よく、時にはボケてみせて、それでいて指示はしっかりとこなす。この場所においては、これくらいオーバーなのが

丁度良いはずだ。

階段を降りながら、懸念すべきことを思考する。
さくらの記憶は、確かに改ざんはした。けれども根の性格は、特に不運体質は、生前のままであるはずだ。
もしもさくらが、「頑張り始めたら」――その時は、何としてでも止めてみせよう。
色々やるべきことはあるだろうが、まずはミーティングを終わらせよう。
鉄製の扉の前に立ち、思いきり深呼吸する。
この先には、ようやくさくらが待ってくれている。そう思うだけで、やっていけるという自信が湧いてきた。
うし。
幸太郎は、軋む扉を開けて、
「おはよーございまーす」
ミーティングルームに、幸太郎の挨拶が反響する。
ルームにはいつものメンバーとロメロが、それに紛れてさくらの姿もあった。
互いに、目と目が合う。
見た感じ、何をどうしていいのかが分からないのだろう。さくらは無言のままで、ただただ幸太郎のことを眺めている。
仕方がないよな、と思う。
だから幸太郎は、さくらめがけ近寄っていく。
「な、なにか？」
息を吸い、
「おはよーございますッ!!」
思いきり、さくらの前で叫んでみせた。
――呆気に取られたのだろう。さくらは、かなり困ったような顔色を示しながらも、
「あ、えと……お、おはよう、ございます」
さくらは、挨拶を返してくれた。
この瞬間から、さくらは本当の意味で生まれ変わったのだと思う。
十年ぶりに、源さくらと再会できたのだと想う。

「……さくら」
「は、はい」
俺はもう、乾太郎ではない。
さくらの魂を弄んだ以上、さくらへ想いを寄せることは許されない。ただのゾンビィプロデューサーとして、これからを生き続けなければならない。
――けれど、でも、
「これだけは、覚えてくれ」
最後に一つだけ、お礼を言わせて欲しい。
僕の人生を変えてくれた、この言葉を。
「挨拶は基本だ」
挨拶は基本だよ。
「できないやつは、認めてもらえんからな」
できないと、みんなに認めてもらえないよ。